

ちりレポ

第 22 号電子版



はじめに

城北中学・高等学校地理部では日本全国の歴史、地理、自然、産業を現地に足を運んで調査をしています。この『ちりレポ』は実際に現地に足を運んだ調査を通じて感じたことや気づいたことなどをまとめ、報告するための機関誌です。

今年度のちりレポは22号目となっており、神田巡見、日光春合宿、金沢夏合宿、川越巡見についてのレポートとなっています。

地理部は旅行好きや地理が好きな人、仲間と一緒に旅行して楽しみたい人など様々な理由で入部していてレポート自体にも色々な個性が出ており地理に興味ない人でも満足していただける内容だと思っております。また、レポートは学会に提出する物の様に堅苦しいものではなく、部員たちが真面目にまとめながらも面白く楽しく執筆しております。これを機に地理に興味を持って実際に土地に足を運んで歴史や土地柄を学んでみたいと思ったり、厚かましいですが地理部に入部してみたいと思ったりしていただけると幸いです。

長々とした挨拶となりましたが最後までちりレポ 22号を是非楽しんで読んでください。

2024年9月28日

城北中学校・高等学校地理部部长 榎本 眞鑑

ちりレポ第 22 号 目次

はじめに	1
ちりレポ第 22 号 目次	2
第一章：夏合宿～加賀国「金沢」	
.....	3
第二章：春合宿～栃木県の地域性「日光・足尾」	
.....	40
第三章：「軍都」横須賀の考察	
.....	61
第四章：神田リバーサイドを巡る	
.....	75
第五章：川越の考察	
.....	87
第六章：付記	
部員紹介	100
春合宿と夏合宿の実施要項	101
おわりに	104

第一章

夏合宿～加賀国「金沢」 (2024年7月31～8月2日)



1. 加賀藩政時代の面影が残る街

金沢城址 文責：水谷 颯

金沢城跡は金沢市中心部、小立野(こだつの)台地の先端部に立地する近世の平山城跡で、明治時代以降は兵部省(ひょうぶしょう)、陸軍省の管轄を経て、金沢大学のキャンパスとなるなど変遷があったが、平成7年(1995年)の大学移転後は、石川県により都市公園「金沢城公園」として整備されている。金沢城跡の主要な範囲は、本丸、二ノ丸、三ノ丸、新丸、金谷出丸(かなやでまる)など総面積約30ヘクタールに及び、重要文化財の金沢城石川門、金沢城三十間長屋、金沢城土蔵(鶴丸倉庫)などが伝わるほか、大規模な近世城郭としての縄張りや高い技術によって構築された石垣などが良好に残り、近世の大大名の政治権力や築城技術を知る上で重要な文化財となっている。櫓門や土塀に見られる、白漆喰の壁にせん瓦を施した海鼠(なまこ)壁と屋根に白い鉛瓦が葺かれた外観、櫓1重目や塀に付けられた唐破風や入母屋破風の出窓は、金沢城の建築の特徴である。

《金沢城の重要文化財》

①石川門

重要文化財に指定されている石川門は、1788年に再建された。金沢城の搦手(裏口)門で、高麗門の一の門、櫓門の二の門、続櫓と二層二階建ての石川櫓で構成された桁形門である。2006年から2014年にかけて、保存修理工事が実施された。



【写真：石川門】

②三十三間長屋

本丸附段にある二層二階の多聞櫓である。1858年の築で、現在の長さは二十六間半となっている。南面は入母屋造りだが、北面は切妻造りで、土台の石垣よりも外壁が後退している。



【写真：三十三間長屋】

③土蔵(鶴丸倉庫)

幕末の1848年に竣工した武具土蔵である。明治以降は、陸軍によって被服庫として使われていた。長らく「鶴丸倉庫」と呼ばれてきたが、実際に建築されているのは「東の丸附段」である。石板を貼った外壁など、櫓や城門などとはデザインを変えている。城郭内に残っている土蔵としては国内最大級の遺構で、総二階建の延床面積約

636 m²（下屋除く）となっている。

長町武家屋敷跡 文責:上野 開都

①江戸時代からの街並み

長町武家屋敷は藩政時代に中級の武士の家敷があった場所である。今も住んでいる人がおり、静かなところであった。その道では敵が来た時に簡単に攻められないように道が複雑になっていて江戸時代から続く道の作りだと感心した。また、長町武家屋敷には土塀があり、敵に攻められないようにしている工夫だと気づいた。近くには有名な野村家の武家屋敷があり、中級武士の屋敷の様子がよくわかる。冬には水分を多く含んだ雪による土塀の土剥がれを防ぐために江戸時代から始まったこもがけが行われるが、夏に行ったのでこもがけを見ることはできなかった。



【写真：土蔵（鶴丸倉庫）】



②大野庄用水

長町武家屋敷の近くには大野庄用水が流れている。大野庄用水は約 10 メートルに渡り、流れていて江戸時代からある重要な用水である。大野庄用水は運搬に使われた多目的用水で金沢城築城に大きな役割を果たしたとされる。また、金石港から大量の木材を運んでいたことから御荷川と呼ばれていた。



【写真5枚：武家屋敷の街並み】

ひがし茶屋街 文責：鈴木涼太

私は城北学園地理部の一員として2024年7月31日から8月2日の期間、石川県に行った。そこで訪れたひがし茶屋街について記録する。金沢文化を代表する茶屋街のひとつ。美しい出格子と石畳が続く古い街並みは国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。1820年に誕生し、今ではたくさんの観光客が訪れるスポットとして、国の重要文化財に指定されたお茶屋や食事処、お土産屋などたくさんのお店が営業している。実際に訪れたのは7月31日である。訪れた第一印象としてはやはり外国人観光客が多いと感じた。これはひがし茶屋街だけに限った話ではなく金沢市内でも外国人観光客が非常に多く、宿泊したホテルでは地理部以外の宿泊客に日本人がいないのではないかと疑うくらいであった。それはさておき、ひがし茶屋街では茶房素心という喫茶店に入った。ここではソフトクリームを食べた。端正な格子戸の家々が連なるひがし茶屋街はまさに金沢らしい風景の筆頭と言えるだろう。

現在の金沢市には3つの茶屋街があり、「にし茶屋街」「主計町茶屋街」「ひがし茶屋街」がある。その中でも最も規模が大きく、金沢百万石の城下町の風情を現在最もとどめているのが「ひがし茶屋街」である。国の重要文化財に指定されたお茶屋や、日本でシェア約9割以上を誇る金沢の金箔を使用した工芸体験や歴史を学べるお店などがある。

茶屋街とは芸妓あそびなど大人の社交場として栄えた江戸時代からの歓楽街のことを言う。艶やかな風情とともに金沢の茶屋文化を現代に伝えているのである。金沢の茶屋街が誕生したのは文政3年、西暦1820年と言われている。現在のひがし茶屋街あたりには当時約90軒あまりの茶屋が並んでいた。その後裕福な町人や文化人が歌舞や和歌を嗜む文化が発生し、それらが行える施設が増える一方で現在で言う風俗店、当時は出合宿と呼ばれた遊女を囲う店を横行するなど、風紀の乱れから加賀藩が何度も禁止令を出し、1度廃止された。慶応3年、西暦1867年に再び公認された歴史がある。



【写真：ひがし茶屋街のようす】

りには当時約90軒あまりの茶屋が並んでいた。その後裕福な町人や文化人が歌舞や和歌を嗜む文化が発生し、それらが行える施設が増える一方で現在で言う風俗店、当時は出合宿と呼ばれた遊女を囲う店を横行するなど、風紀の乱れから加賀藩が何度も禁止令を出し、1度廃止された。慶応3年、西暦1867年に再び公認された歴史がある。

明治時代に入ると浅野川沿いに主計町茶屋街などが出来てそれ以降金沢の茶屋街として発展していった。

そのような歴史を経て、重要伝統的建造物群保存地区に指定されているひがし・主計町茶屋街には典型的な茶屋様式を持つ建造物

が多く立ち並んでおりまるで昔にタイムスリップしたかのような美しく情緒ある街並みや雰囲気が感じられた。

にし茶屋街 文責：遠藤 壮一郎

ひがし茶屋街、主計町茶屋街と並ぶ金沢三茶屋街のひとつであるにし茶屋街は多くの観光客で賑わうひがし茶屋街に比べ、茶屋街のエリアは小さいが、約 100m の情緒溢れる通りに出格子の茶屋建築が連なり、江戸時代の面影を色濃く残している。にし茶屋街では華やかな芸妓がたくさん



【写真：にし茶屋街の街並み】

活躍しており、出格子が美しい二階建ての茶屋建築に老舗割烹が軒を並べ、趣のある一角を作り上げている。北陸随一の繁華街、片町からほど近く、金沢三寺院の中で最も大きい茶屋街寺町寺院群や医王山系の山々を望む犀川なども徒歩圏内である。1820年に加賀藩から公許された花街の一つ、「西の廓（当時、花街は一般社会と遮断するため堀が張り巡らされ『廓』が形成され、金沢城から見た方角が『西』であったことからこのように呼ばれた）」が現在のにし茶屋街である。にし茶屋街の一番奥に大正期の作家・島田清次郎が過ごしたかつてのお茶屋「吉米楼」の跡地にその作りを再現した西茶屋資料館があり、一階は作家・島田清次郎に関する資料展示、2階は今でもお茶屋遊びが行われているかのような金屏風や漆塗りの装飾品など豪華な茶屋の内部が再現されている。また、大正時代に建てられた「西検番事務所（国の登録有形文化財）」は、ひがし茶屋街や主計町茶屋街とは異なり洋風な佇まいが特徴の事務所である。

金箔工芸館 文責：切手 悠介

金箔工芸館は、一階には多目的展示ホール、二階には常設展示室、企画展示室などがある。多目的展示ホールにはモニターがあり、そのモニターを通して、金箔の作り方を知ることができる。金箔の作り方で重視しているのは厚さで、その厚さは約一万分の一ミリで、向こうの景色が透けて見えるほど薄くなっている。このモニターで紹介されていた作り方は、断切金箔の製造工程で、他の作り方より効率的に量産できるため、価格が安く、生産量も多くなっている。そのため、現在の金箔の主流となっている。断切金箔



【写真：金箔工芸館】

は、重さが均一になるように上澄を切り分け（澄切）、箔打紙に切り分けた上澄を挟み（仕入れ）、温度調節をしながら箔打紙をまとめて箔打機で約一万分の一ミリの薄さまで打ち延ばし（打ち前）、打ち上がった金箔を検品しながら金箔と金箔の間に箔合紙を挟んで重ね（箔移し）、約千枚の金箔を重ねたものを規定の大きさに切って（箔断ち）出来上がりである。

常設展示室には、大人も子供も金箔について楽しく学べる様々な工夫が凝らされている。そこでは、金箔が今のように隆盛を見るようになった歴史や、金を約一万分の一ミリという極限の薄さに延ばす巨大な箔打機の展示、金箔の元となる合金を造る金合わせと呼ばれる工程から仕上がりまでの製造工程などを、実際に職人が使っていた道具を使って解説されている。また、箔物館と呼ばれる展示もされている。この展示では、金と身近な金属との重さの違いや金箔の種類の違い、金箔と身近なものとの厚さの違いなどを体験できる仕掛けがあり、金の性質を分かりやすく解説している。そして、常設展示室から企画展示室につながるスペースには「百枚の金箔」と名づけられたオブジェがある。これは職人の巧みな技で仕上げられた金箔が、作品へと変貌していくことをイメージしている。

企画展示室では館の所蔵品を中心に年四～五回の企画展を開催している。中世後期から現代までの金箔関連の作品を展示しており、金屏風や陶磁器、漆工芸、金箔工芸など様々なものがあり、それらは全て収蔵庫で収蔵されている。美術工芸作品の中には、「洛中洛外図屏風」「能装束庵に草花文様唐織」「松に鶴蒔絵硯箱」「截金十一面観音像」「色絵金欄手花生」などがある。

金箔には種類があり、市販の金箔は、不純物元素を含まない純金ではなく、銀や銅を添加した合金でできている。合金にすることで、打ち延ばしやすくなり、適度な硬さと変形抵抗を与えることができる。また、銀や銅を適度に加えることによって色調を変化させることができる。合金は主に七種類あり、金の割合が多い順に純金五毛色、純金一号色、純金二号色、純金三号色、純金四号色、三歩色、定色である。金の純度が高いと、赤みを帯びた黄金色になり、銀の量が多いと赤みは消滅する。一方、銅を添加すると赤みを帯びる。

金箔は、特徴によって縁付金箔と断切金箔の二つに分けることができる。縁付金箔の場合、打ち紙に手漉き和紙を用いているので、格子状の紗の目が金箔に現れている。断切金箔の場合、透かしてみると放射状の模様が見える。これらは箔の伸び方向と関係していて、厚さの不均一があることを意味している。また、断切金箔は縁付金箔よりわずかに厚いと言われている。

金箔の製造は、平成以降の長期的な不況の中、減少傾向にあり、職人の数も減っている。このような中、平成二十一年に「金沢金箔伝統技術保存会」が設立され、伝

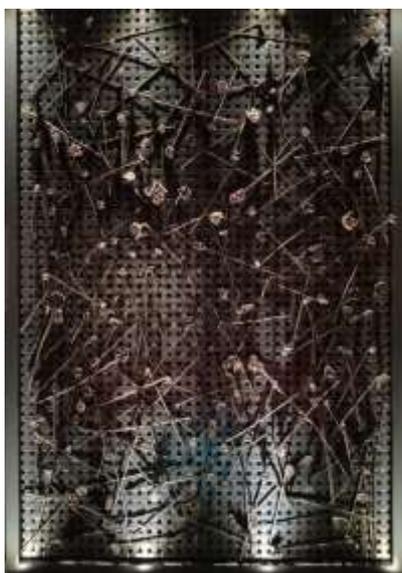
統的な製法で作られる金箔の技術を次の世代へ伝承する動きが起こっている。

森八本店～落雁作り体験～ 文責：池田 鴻平

森八とは創業寛永2年（1625）の日本の菓子メーカーである。金沢市にある本店では1階では菓子の購入、2階では木型美術館の展示を見ることができる。また落雁作り体験をすることも可能である。今回の合宿では落雁作り体験を目的として行ったが、予定よりも少し早く着いたため木型美術館の展示を見た。木型美術館には主に落雁を作るための木型が主に展示されているが、九谷焼や木型の刷り込みに用いられた渋紙を用いた渋紙アートも展示されている。その他にも現代アートや多くの木型を壁に展示した木型トンネルも見ることができる。



【写真：渋紙アート（撮影が下手で撮影者が反射で写ってしまっている。申し訳ない。）】



【写真（左）：現代アート

（撮影者は説明を読んだもののよく分からなかった）】



【写真：展示室のようす】



【写真：上は展示されていた木型／

右は木型のトンネル】



《落雁作り体験》

落雁は和三盆と呼ばれる砂糖と米粉が材料となっている。作り方は非常にシンプルで木型に入れ、押し固めて木型から外すだけと誰でも簡単に作れるようになっている。木型にはたくさんの種類の方があり、動物や縁起物の型が存在する。現在木型を彫る職人が減っており全国に2、3人だけしかおらず、普段は木型美術館に展示されているものでも場合によっては取り出して使うことも珍しくないという状況になっている。



【写真：左は落雁作りを体験する地理部員／

上は完成した落雁と抹茶】



【写真：金沢城の城下の図】

《常設展》

古代：日本海を通じた交流をし、山陰や東北、大陸や朝鮮との間で人や物が往来し、古墳や渤海使の文物から軌跡がうかがえる。

中世：室町の応仁の乱は、下克上の風潮に拍車をかけ、各地の戦国大名が領国経営を進める中、加賀では一向宗の門徒たちが「百姓ノ持タル国」と呼ばれる体制を築き上げた。

近世：加賀藩の歴史は、1581年に前田利家が織田信長から能登一国を与えられたことに始まり、独自の家臣団や城下町、農村政策を展開して統治を続けた。

近代：工芸品などを輸出産業として奨励する「美術工業」が栄えた。藩政期以来の蓄積を背景とした地場産業の振興は、殖産興業の特徴の一つといえる。

《民俗展示》

無形文化遺産の「あえのこと」は豊作大漁を祈願・感謝し、神へ山海の恵みをささげるとともに、神と住民がひとつになるために、共同飲食をする行事である。能登半島の各集落では、現在も、当屋という世話役が、神饌（しんせん）や直会（なおらい）料理の準備などにあたっている。

町場では、多くの見物客を意識し、曳山（ひきや）や練り物などの華やかな風流世界が発達し、獅子舞、加賀地方の豪華絢爛な曳山、能登地方の巨大灯籠・扇型曳山・粹旗わくばたがある。



【写真：「あえのこと」の供物】

2015年のリニューアルで、展示品の数を減らして動画やジオラマが増えた。北陸の成り立ちや日本海交流については初見で、一向一揆や祭りの映像等はとても参考になった。

《特別展 知の大冒険 —東洋文庫 名品の煌めき—》

「万葉集」「行基図」「訓民正音」「史紀」「ジャワ誌」「東方見聞録」「ナポレオン辞典」などの初版にあたる書籍が展示されている。どれも教科書にある書籍ばかりであり国宝

並に重要な歴史的史料である。そのため1度見るだけでも貴重な体験ができたと言えた。

《赤レンガ建物》

博物館として使われている3棟の「赤レンガ建物」は、かつて陸軍兵器庫、戦後は金沢美術工芸大学に使用されていて、今では重要文化財に指定されている。兵器庫として作られた赤レンガ建物



【写真：赤レンガの建物】

は、当時全国各地にあったが、現存するものは4カ所だけというとても貴重な建築である。明治末期から大正初期にかけて建てられた建築は、当時のデザイン様式がそのまま残っていて、金沢の町に溶け込むノスタルジックな佇まいとなっている。

各建物とも左右対称であり、第1・2棟は長さ90.9mで、幅は14.5mの規模で、第3棟は長さ85.4mとやや短い。

近江町市場 文責：野口 琉也

近江町市場は金沢の食文化を支える『市民の台所』として広く親しまれている市場である。この市場の起源は1690年から1720年城下町で多発した火災にある。この火災を受けて市内の市場が近江町市場に集約されることになった。藩政時代から300年以上の歴史を持つ近江町市場は市民からは『おみちよ』の愛称で呼ばれ、地域の重要な存在となっている。今も新鮮な魚や野菜、果物などの専門店や飲食店が約170ほど軒を並べており、市民だけでなく多くの観光客で賑わっている。



【写真：近江町市場】

実際に近江町市場に行ってみると、やはり海鮮や果物、花なども売られていた。海鮮が売られている店には買うだけでなく、その場で食べられる店もあった。また、近江町市場に来ていた客には、観光客ももちろん多かったが、買い物に来ている市民も多い印象を受けた。それだけ市民から親しまれているということが分かった。

金沢のある石川県は暖流の対馬海流、寒流のリマン海流のぶつかる潮目に位置している。そのため、石川県沖の海ではプランクトンが豊富で魚が



【写真：左は近江町市場内の様子／右はのどぐろのお寿司】

よく獲れる。その中でも金沢でとくに有名なのがのどぐろである。そこで、他の部員とともに近江町市場のお店でのどぐろのお寿司を食べることにした。写真の左二つがのどぐろである。見た目は普通の白身魚だが、味はさっぱりしておらず、脂の乗ったおいしい魚だった。

2. 金沢市の周辺地域

内灘町：内灘砂丘 文責：水谷 颯

金沢市粟崎町から河北郡内灘町を経てかほく市（旧同郡宇ノ気町）に至る海岸線に発達した砂丘で、日本で三番目の大きさを誇っている。ニセアカシア・クロマツ・ネムノキなどが砂防のため植栽され、浜辺にはハマナスやイソスミレなど貴重な海浜植物もある。また、砂丘の一部は畑や水田としても利用され、宇ノ気町大崎には全国でもユニークな県立砂丘地農業試験場がある。金沢市の南の白山から流れてくる手取川（別名石川）から運搬された土砂が日本海に流れ、対馬海流に流されて堆積して形成された。同じように石川県の日本海側には広範囲に砂丘があり、内灘砂丘は金沢市金石から羽咋市羽咋までの約 37km に及ぶとする説から金沢市粟崎からかほく市（旧河北郡宇ノ気町）までの約 10km とする説がある。また周辺には、大聖寺砂丘、小松砂丘、高松砂丘、羽咋砂丘がある。内灘砂丘は新旧 2 つの層からなり、旧砂丘からは石器時代の遺物が出土している。内灘砂丘が位置する内灘町は加賀地方最初の石器発見地として考古学上著名であり、町域各所の砂丘埋没黒土層には、縄文時代から古墳時代初頭の遺物が埋蔵され、早くから人々の生活が営まれてきたことを示している。また、古代の遺物として、日本最北端の出土品として重要視されている弥生時代の「銅鐸」が、当町河北潟のほとりで発見されている。中世においては、式内社である小濱神社（黒津船権現）が現在の権現森に鎮座し、近郷七箇村の中心的な位置を占め、その結合の核となっていた。また、小濱神社は江戸時代になっても加賀藩前田氏の保護のもと、当町の歴史に少なからず影響を与えてきた。



【写真（左／右）：内灘砂丘】

小松市：こまつの社 文責：新井 友翔

レジェメがないので「小松の社」の基本的な情報から書こうと思う。小松の社は小松駅から徒歩1分のところにある、世界2位の売り上げを誇る「コマツ」の歴史や様々な技術を知ることができる施設として2011年に設立された。

敷地内に最初に入って目に入ったのは巨大なダンプトラックと油圧ショベルだ。その大きさにはかなり度肝を抜かれ、日本ではとても運用できるサイズではないと思った。

施設の中はキッズ館と歴史館に分かれている。キッズ館ではゲーム感覚で建設用の重機に触れることができ、高校生が行くのは忍びなかった。歴史館ではコマツの始まりから現代までが細かく展示さ



【写真：上はダンプトラック 930E
下は大型油圧ショベル PC4000】

れていた。コマツの始まりは創業者である竹内明太郎が1921年に小松鋳業から独立し小松製作所となった。「良品に国境なし」という志の下に創業時から世界市場を視野に入れて製作していた。戦後、荒廃した日本が急速に復興を果たす中、インフラの需要が大きく増え、小松製作所はこの需要に応えることで大きく成長した。また、戦後はトラクターや鋳鋼の事業の強化を通し規模を拡大し、国内の建設機メーカーとしての地位を確立した。ところが1960年代に入り、日本経済の国際化が進む中、建設機メーカー世界1位のキャタピラ社の進出が決まった。小松製作所はそれに対抗すべく、徹底した品質向



【写真：G25型ガソリントラクター】

すものだ。世界中で運用されてる小松の製品を管理できるのは確かに生産性が上がるなと思った。近年では環境負荷の低減を目指しており、時代の流れにも対応しているように見えた。

上を目指した。この時の思想が現代まで受け継がれて小松製作所が評価されてる所以ではないかと思った。1990年以降、小松製作所はICT（情報通信技術）を駆使した製品の開発に注力した。2008年には、建設現場の効率を大きく向上させるICTを活用した「スマートコンストラクション」事業を開始した。この事業はドローンや3D映像を活用して生産性の向上とコスト削減を目指

3. 田畑班の旅行記

1日目 文責：薛 文森

初めての旅行記で、先輩様方の旅行記の見様見真似で書いているため内容が粗いですがご容赦ください。具体的には字数稼ぎが多いですが優しく見守ってください。

新幹線の予約の都合により9時20分東京駅集合だったのだが、車輪の広場は中3の時に1回利用しているからか、マイナス数分前の到着者が多数ということも無く珍しく順調なスタートを切った。プラス数分前の到着者が多くいたのだが、東京駅はミノタウロスの迷宮とさほど変わらないので、初めての合宿にも時間を厳守した中1は有望かも...?さて北陸新幹線に乗り込むと意外にも満員だったりして(意外)、グランクラス乗りたいなーと予算的に無理な夢を思い浮かべながら金沢まで2時間。長野も快晴でおにぎりを食べながら、北アルプスを突っ切れたら時間短縮できるのに、トリニア中央は偉大だなと思い初めてまもなく金沢駅に到着。

名物鼓門(木造らしい、雷門みたい?)の北側に池袋に匹敵するほどの数のバス停があり、金沢の交通はほぼバスで成り立っていると実感した。1分に1~2本はバスが出ているターミナルからバスで10分ほど、最初の目的地、東茶屋街に到



【写真：1】



【写真：2】

着した。もちろんそのまま観光するわけもなく近くの浅野川で少し戯ってから宇多須神社に参拝。ちなみにおみくじは大吉だった。大吉率が高くて逆に大凶を引きたい（京都奈良研修旅行の時4回大吉）。折り返して、カフェで金箔アイスを頂きました。鉄みみたいな金属の味が楽しめました。

お昼頃で、金沢の屈指の観光地にしてはかなり空いてい

ました。台風1号による大雨警報のせいかな？バカンスを利用したのだろうか欧米の方が多かった。

次に向かったのは石川県立歴史博物館。バス5分の後、体感10分ほどの坂道を登る。木陰があったとはいえ、10%急の坂道を30℃近くの中登るのは文化部にとってはきついものだった。金沢城の中腹にあるせいだ__整地しよう！（筆者はマ○クラ民）



【写真：左4／右5】

博物館は2棟の「赤レンガ建物」の中にあり、内装も大正の面影を残しており良い雰囲気でした。高校生以下は無料で、¥15000 丁度しか持ってきて居ない身としてかなり助けられました。おすすめは古代・民俗展示で他の博物館と違った独自の展示で、日本海を通じた交流(ex 知名度の低い渤海使の説明がある)や無形文化遺産の「あえのこと」を中心に民俗学の研究者は感激してそうな詳しい儀式・祭礼が映像や展示品を伴って説明させている。関東ではお目に掛からなさそうなものばかりでめずらしい展示が見れた。ただし筆者はあまり興味がなかったもので、怒られない程度しか観ていないので詳細は忘れている。休憩室は白で統一されている近未来風な東屋みたいな部屋(室内)であり、大正感のある「赤レンガ建物」とのコントラストが素晴らしかった。/またこちらのレポートも私が担当しておりますのでぜひご覧ください。



【写真：上3／下6】



【写真：左7／右8】



【写真：9】

さて、涼しい屋内での休憩のあとに本日最後の目的地兼六園。詳しい内容は他のレポートに任せ、ざっくり説明します。園内は城北のグラウンド7～8倍の広さで十分かくれんぼや迷子になるのに適している。園内には噴水もあり、霞ヶ池を水源として池の水面との高低差を利用した自然の水圧で水が吹き上がり、高さも霞ヶ池の水位の変化で変わるらしい。園内に曲水が流れて

おり、これも高さを利用して生き生きと流れていた。また、人が多く、欧米系もアジア系も関西弁を話されている方が多かった。ちなみに水を買おうとして売店に寄ったら閉店したと言われて買えなかったが、その後自販機を発見した。自販機のない都市は砂漠に近いほど水は外出先で見つけないものの一つなので気をつけたい。

なお、日本三名園の選定理由として、「雪月花」の雪に兼六園、月に岡山後楽園、花に偕楽園を対応させたという一論が存在するほど兼六園の雪景色は凄いはず(説得力 0)なので、もし金沢を訪れるなら冬がおすすめです。

その後は予定どおりにホテルに到着。今回のホテルはビジネスホテルのホテル アマネク金沢です。ビジネスホテルなのでアメニティーがいらず、荷物が少なかった。荷物を置いて予定していたレストランで夕食する...はずが予約で埋まっていたので食べれず。立地が繁華街片町のそばのせいで適したレストランが全く見つからず、1時間さまよった末最後はLINE 上で紹介のあった8番ラーメンへ。値段は東京と大して変わらずであり、魅力としては『スープの一番人気は沖縄から取り寄せた塩を使ったスープだ。』

「野菜ラーメン」は、野菜のシャキシャキ感を強い火力で一気に炒め上げることで、野菜のみずみずしさを感ずる食感を実現している。』らしいです。餃子18個は825円とか



【写真：10】



【写真：11】

なり気前の良い値段で、3人で分けて食べました。その後は部屋でごろごろして消灯。寝れなかったのでロビーでくつろいでいると外の道路が半分タク

シーで占領されていることに気づく。タクシーの往来を眺めているうちに眠くなったので部屋に戻ろうとして中1と遭遇(23時)。中1は元気でいいなと思いながら1日目を終えた。最後まで発見のあった1日でした。ただもっと多くの写真を撮りたかったです。

《写真の説明》

写真1：鼓門 2日目夕撮影 ライトアップきれい

写真2：浅野川 地元では「男川」と呼ばれる犀川に対して、別名「女川」の愛称で呼ばれる。5月には鯉のぼりを川に流す「浅の川鯉流し」、9月には河川敷がキャンドルや灯籠でライトアップされる「女川祭」が開催される。

写真3：金箔アイス 金箔は食べ過ぎないように！

写真4：宇多須神社 これより北には卯辰山山麓寺院群という寺町寺院群がある。この神社が金沢城北の守りの司令所だったのかもしれない(詳しくは妙立寺)

写真5：梅の橋 歩行者専用の橋で鋼橋で木製ではないが、ひがし茶屋街の雰囲気溶け込んでいる。

写真6：博物館内の近代チックな階段

写真7：今時の都会では見えなくなったツバメ かわいい__橋場町 ひがし茶屋バス停の近く

写真8：兼六園から北の展望 天気は快晴

写真9：木陰から眺める霞ヶ池

写真10：片町バス停

写真11：8番ラーメン餃子 18個 825円

2日目 文責：野口 琉也

僕たちの班はホテルを出てまずはじめに長町武家屋敷界隈へ向かった。このあたりの建造物は加賀藩の藩政時代の面影を残しており、江戸時代から続く長い歴史を感じる街並みが見られた。特に、武家屋敷野村家は、内部まで見学することができ、1200石の野村家の權威を感じられた。

武家屋敷の見学が終わると次にバスに乗って、にし茶屋街と妙立寺の方面へ移動した。最初は妙立寺を見学した。妙立寺には、男なら誰しも一度は憧れるようなからくりがたくさん施されており、僕は興奮した。例えば、床板が外れるようになっていて、隠し階段があったり、押入れが二十扉になっていて、押入れのさらに奥



【写真：武家屋敷へ向かう部員たち】

の部屋にいけるようになっていたりした。別名「忍者寺」と呼ばれるだけあり、ほかにもよく考えられたからくりがたくさんあった。妙立寺内部の写真撮影は禁止されていたので、ぜひ実際に行ってみてほしい。



【写真：妙立寺】

妙立寺の見学が終わると、次は徒歩5分ほどの場所にあるにし茶屋街へと向かった。ここは、ひがし茶屋街に比べて規模が小さく、50mほどの茶屋街だった。少し朝早かったせいか、人通りは少なくあまり活気がないように感じられた。おそらくこのにし茶屋街は主計町茶屋街と同様に、店の多くが料亭であるために日中はあまり人がいないのだと思った。

にし茶屋街の見学が終わると次はまたバスに乗って移動し昼食も兼ねて近江町市場に向かった。このとき、他の班もちょうど近江町市場を見学していたので、僕は他の班の同級生と共に昼食をとることにした。近江町市場はのどぐろが有名なので、のどぐろのある店に入ってお寿司を食べた。言うまでもなく、めちゃくちゃおいしかった。



【写真：左はにし茶屋街／右はお昼ご飯に食べたお寿司】



昼食を食べ終え、次に向かったのは金箔工芸館である。ここでは、金箔の知識やその製造過程、金箔を使った美術作品を見学することができる。見学した中で、僕が最も印象に残ったことは、金箔が光を透過する性質を持っているということである。金は重く、密度が高いイメージがあったのであまり光を通さないのではないかと勝手に思っていたが、実際はその逆の性質を持っていたため感銘を受けた。

【写真：金箔工芸館の展示品】

次に向かったのは、金沢城跡である。金箔工芸館からはバスで向かったものの、外はかなり気温が高く、僕も他の部員も疲れてきていた。そこで僕は金沢城をひととおり見学した後、近くにあった抹茶屋で抹茶ソフトクリームを食べた。暑い中を歩き回った後に食べるソフトクリームは一味違った、、、。



【写真：左は金沢城前でレジュメを読む部員／右は抹茶ソフトクリーム】



【写真（左／右）：加賀友禪】



【写真：国立工芸館 外観】

金沢城の見学が終わると次に歩いて加賀友禪会館へ向かった。ここには数多くの加賀友禪の着物が飾られていた。勉強の上で、石川の伝統工芸品は加賀友禪だ、ということは知っていたが実際にどのようなものなのかは全然知らなかったのので、加賀友禪に関する知識をより深められた。

加賀友禪会館の見学が終わると合宿2日目の最後に向かったのは国立工芸館である。外観は洋風の建造物でよく映える施設だった。中には日本の工芸品や美術品が展示されていた。正直、作者はどういう頭の構造をしているのだろうと思うような作品がたくさんあった。僕にはまだレベルが高い施設だった。そして、国立工芸館の見学が終わると

ホテルに戻り二日目の行程は終了した。この日はとても暑かったので、外の見学はかなり体力を消耗した。しかし、予定していた行程どおりに行動することができた。これはやはり屋外の施設ばかりでなく屋内の涼しい施設をはさんだ行程がよかったのだと思う。夏の旅の予定を立てる際は行く場所だけでなく、暑さを考慮することも大事だと改めて実感した。

4. 水谷班の旅行記

1日目 文責：池田 鴻平

1日目は、昼食を各自で用意してから新幹線に乗り、金沢駅へと向かった。昼食は自由だったためコンビニ飯でも良いと思ったが、せっかくの機会だったので高2生は全員東京駅の「祭」という店で駅弁を購入した。新幹線に乗りしてからは暇だったため、事前にamazon prime videosでダウンロードしておいた映画「死刑にいたる病」を隣に座っていた部長の榎本と視聴した。映画を視聴していたらまだ10時頃であったが空腹



【写真：左は部長の榎本と金沢駅／右は池田が購入した駅弁】

だったので 2 人で映画を視聴しながら購入した駅弁を 10 時半には完食。ちなみに映画は不具合で途中までしかダウンロードされておらず、途中で視聴は断念。その後は金沢駅に到着するまで YouTube とスマホゲームで時間を潰した。12 時半に金沢駅に到着し、記念に榎本と金沢駅の看板(?)を撮影。



【写真：鼓門】

金沢駅に到着後は 3 班に分かれて、班ごとに金沢市内を巡った。自分の属する班は、バスに乗って橋場町駅まで行き、1 時間程かけてひがし茶屋街と主計町茶屋街を巡った。

ひがし茶屋街は主計町茶屋街に比べてかなり観光客向けになっていた。ひがし茶屋街は、金箔専門店や茶屋などが並ぶ大きな通りの他にも周辺の細い路地に九谷焼の店や甘味処が多く並んでいた。細い路地には人が少なくて居心地が良かった。是非メインの大きな通りだけでなく、細い路地にも入ってみてほしい。自分は、ひがし茶屋街では好物の抹茶アイスを食べた。抹茶アイスは抹茶の風味によって 4 段階で販売されていた。自分は上から 2 つ目のものを購入したが、1 番上のものでも良いと思った。主計町茶屋街はかつてはただの茶を提供する

だけの旅人の休憩所だったが、料理屋へ変化し、現在では高級な料亭に変化したものも多く、学生が入れるような雰囲気ではなかった。



【写真：左はひがし茶屋街／右は抹茶アイス】



【写真：左はひがし茶屋街の路地／右は主計町茶屋街】

茶屋街をひと通り巡った後は、バスで近江町市場へと向かった。近江町市場では野菜や海鮮、果物などが売られていた。写真をたくさん撮影したかったが、店の写真だけ取るのは申し訳なく感じた上に買ってほしいという無言の圧を感じたため

あまり撮れなかった。(笑) 市場では時間が少ししかなかったが寿司屋でマグロの赤身と納豆巻きを食べた。もっと他のネタも食べたかった。;

近江町市場を巡ったのち、にし茶屋街へと向かった。西茶屋街は主計町茶屋街ほどではなかったものの、学生では入りづらい店が並んでいたため、西茶屋資料館を見た後はほとんど休憩した。当日は非常に暑かったため班員全員が自分を含め既にぐったりとしている印象だった。西茶屋資料館では、西茶屋街の歴史の紹介だけでなく、茶室を再現した部屋が展示されていた。茶室は見るだけで入ることはできなかった。



【写真：近江町市場】

この日最後に向かったのは忍者寺。忍者寺には忍者にふさわしい仕掛けがあり、見るだけではよくわからないのでガイドがあった。しかし、ガイドを付けるには予約が必要で当日予約の場合は時間がかかってしまいそうだったので自分の班はガイドは付かなかった。後日他の班がガイド付きで行ったときの話によると、廊下が迷路のようになっていたり、隠し階段があるそうだ。また都市伝説程度だが昔は地下を通じて忍者寺と金沢城は繋がっていたとのこと。ぜひ行く際はガイドの予約をして行ってほしい。

忍者寺を見た後は近くのコンビニで休憩。自分はその場で初めてアイスの実を購入した。とてもおいしかった。



【写真：まぐろ赤身】

休憩をしたのち、そのままホテルへと向かった。途中の道に何やら異変のありそうなラーメンチェーン店の8番らめんの店舗を発見。ホテルに



【写真：左はにし茶屋資料館／右はにし茶屋街】

到着した後は少し休んでから中1を連れて近くのカツカレー屋のターバンカレーで夕飯を食べた。食事をしていると部活のLINEに関東では大雨のため学校が休校になるという旨のメッセージがあったので大雨の犯人であることを自白した。

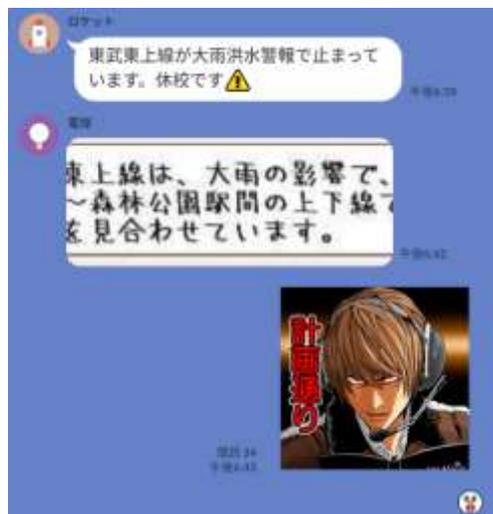


【写真：忍者寺】

【写真：左はターバンカレー外観／右はロースカツカレー／左下は8番ラーメン外観】



大雨の犯人は...? 使用したスタンプ: DEATH NOTE



2日目 文責：遠藤 壮一郎

2日目は、まず落雁手作り体験をするために森八本店に向かった。予定より早く着きすぎたため森八本店内にある金沢菓子木型美術館を見る余裕があった。1000点以上の木型を見てこんなにも数があるのかと知っているうちに落雁を作る時間になった。私自身落雁を作るのは初めてで、また私はお菓子作りはもちろん料理もほとんど作れないため落雁がちゃんと作れるか不安であった。しかし、作ってみると意外と簡単で不器用な私でも14個も作ることができた。作り終わった後、作った落雁と点てて下さった抹茶を一緒にいただくことができるのだが、その抹茶が思ったより熱く自分のパンツにこぼしてしまった。しかもその時履いていたパンツが白だったため緑色のしみができてしまった。これからは合宿の際は白のパンツを履くのはやめようと心に誓った。(抹茶のしみは、帰宅してから、一学期の家庭科で学習したしみの落とし方を実践し綺麗に落とすことができた。家庭科の授業を真面目に受けておいてよかった。)落雁は和三盆の上品な甘みとほろほろとした口当たりが絶妙でとても美味しかった。



【写真(上/中/下)：落雁作り体験】

ホテルに戻りパンツを履き替えた後、次は兼六園に向かった。兼六園は日本三名園の一つであるためかねてより訪れてみたいと思っていた。園内は緑が深く、池や滝の流れが涼しげで、この日は猛暑であったにもかかわらず体感温度が2、3度下がったように感じられ、とても癒された。



【写真：兼六園の霞ヶ池】

昼食の後、金沢城公園に向かった。ここで一番感じたことは今年1月の地震の影響が能登だけでなく金沢にも出ているということである。金沢城の二の丸などには地震の

影響で入ることができなかった。合宿の後ネットで調べてみたところ五か所で石垣が崩落しており復旧工事が完了するまでにあと15年かかると知り驚いた。復旧した石垣をいつか見てみたいと思った。

次に金沢市立安江金箔工芸館に向かった。金箔は金だけでなく銀や銅も含まれる合金でできていることなど知らないことがたくさんあり非常に興味深かった。



【写真：金沢城公園の菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓】

次の内灘砂丘に向かうためにはまず工芸館から北鉄金沢駅まで行かなければいけないのだがそこに行くためのバスが予定より遅れていたため後に乗る北陸鉄道浅野川線を一本遅らせることになった。バスは遅れる可能性があることを忘れていたのでこれからは時間に余裕を持って行動しようと思った。最後の目的地である内灘砂丘に着いた時、



【写真：北陸鉄道浅野川線】

私はもう歩けないほど疲労困憊していたのだが砂丘と海を見て疲れが吹っ飛んだ。久しぶりに見た海を前にして思わず飛び込みたくなったが、あいにく水着がなかったため波打ち際で遊んだ。これで1日の行程を終えたと思ったが最後に事件が待っていた。内灘砂丘を見終わり、帰りの電車が来るまで

時間があるため、内灘駅の自販機で麦茶を買おうと思ったら通学定期も兼ねているSuicaがないのである。財布の中を見てもリュックの中を見てもないのである。深い悲しみの中、水谷君に私のSuicaを見ていないか聞いてみると北陸金沢駅でSuicaっぽいのが落ちていたという。財布を最後に開いたのがその駅で切符を買った時なのでそこにあると思いつつもそこになかったらどうしようという期待と不安の中、北陸金沢駅の駅員さんに聞いてみると私のSuicaを駅員さんが保管してくださっていたのである。この時の嬉しさは今も忘れられない。石川県の方々の温かさに触れた瞬間だった。今回は見つけてよかったがもし初めて来た土地で落とし物をすると大変なことになるため今後は気をつけたい。

以上が私が初めて書いた旅行記です。私自身初めて書くため拙いところもありますがそこは目を瞑って読んでいただけたら幸いです。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

5. 新井班の旅行記

1日目 文責：安藤 隼太郎

こんにちは。地理部 4 年目(高一)の安藤と申します。今回の合宿は、初めての高一が主体となつての活動で、7月31日～8月2日に金沢に行くことになった。いつも通り3つの班に分かれ、私の班は1日目は尾山神社、兼六園、ひがし茶屋街を訪問することになった。こちらでは、その1日目の報告を私の視点からしたいと思う。なお、私は基本的に新井班長、鈴木君、五月女君、為野君と行動しています。

まず、集合は9時20分東京駅の動輪広場となった。いつもの合宿の集合時間は大体7時半ごろなので今回はとても良心的である。本当に助かる。その後、全員定刻通り集合でき、北陸新幹線に乗った。走行中の景色は、トンネルが多いように感じた。ただ、糸魚川で日本海がのぞめた時は少し盛り上がった。昼食は車内でとることになっていたが、少し酔ってしまい、半分ほどしか食べられなかったことは忘れようと思う。



【写真：走行中の車窓 日本海が望める】

そして、3時間ほどの乗車の末、金沢到着。私にとっては北陸初上陸である。金沢駅は世界で美しい駅14選に国内唯一の選出である6位にノミネートされただけあって、ガラス張りの天井(京都駅と似たようなもの)や駅の東口にある、能楽の鼓を模った鼓門(つづみもん)はかなり面白いデザインだった。ここで、私は鈴木君の「こういう設計をする建築士もすごいけど、これを築き上げた大工さんすごくない？」的な発言をしていたのが印象に残った。確かに私たちが大工の苦労を考えることはあまりないかもしれない。

その後、周遊バスに乗って尾山神社に向かった。バスが全国交通系 IC 使用不可で、地方の交通 IC または現金支払いなのは、地方あるあるだなあと考えた。そんなこんなで尾山神社に到着した。ここは西洋の建築技術と日本の建築技術が混在している、いわば和洋折衷がある神社である。実際に行ってみても、手水社(手を洗うところ)や鳥居、本殿はいかにも Japanese shrine という感じだが、門は明らかに洋風な作りに感じた。また、境内には神苑



【写真：尾山神社で集合写真】

と呼ばれる池泉回転式やガラス張りの資料館のような施設もあり、かなりいい感じの雰囲気だった。池の水は抹茶色だったが。

その後、金沢城公園沿いの道に沿って歩き、兼六園に向かった。ここは、言わずと知れた日本三名園の1つで、どの季節でも美しく見えるように作られている。ちなみに、松平定信が、「洛陽名園記」を引用し、宏大・幽邃・人力・蒼古・水泉・眺望の6つの景観を兼ね備えていることから「兼六園」と命名したと言われている。実際に巡ってみて、私の語彙力では高尚な表現はできないが、多くの青々しく茂っている木と池の調和から夏らしさを感じることができ、素晴らしかった。また、この日に訪れた場所で最も多くのインバウンドが見られた。インバウンドと言われると中国や韓国、東南アジア諸国などアジア系の人々が連想されがちだが、近年は欧米の人の割合も増えているらしい。

兼六園の見学を終えたところで、次はひがし茶屋街に行くことになっていた。兼六園とひがし茶屋街は徒歩20分ほどかかるので、この危険な暑さの日に徒歩移動を多用するのは悪手だと思い、バスを使うことになっていた。そして兼六園の前のバス停に向かうのだが、ここのバス停は乗り場が方面



【写真：兼六園】

によって道を挟んで逆側に位置しており、2回も乗り損ねてしまい、結局歩きで行くことになった。やはり前調べはきちんとやった方がいいと実感した。そんなこんなでひがし茶屋街に着いた。ひがし茶屋街は文政三年（1820）に12代藩主、前田斉広の許しを得



【写真：ひがし茶屋街】

て、金沢の中心部に点在していたお茶屋をここに集めて、公認の遊里として誕生させたのが始まりで、現在は金沢を代表する観光地になっている。先述のバスの乗車ミスで結構時間をロスしてしまったため、割と時間がタイトだったのでこの散策は比較的短時間だったが、高一、中一の部員で喫茶店でソフトクリームを食べながら交流することができた。なお、金沢は金箔が特産品なので、ここでは金箔ソフトというものも売っており、新井君と五月女くんはそれを食べたそう。金箔と通常では500円ほど金額が変わるので、結構金額は張るが、せっかくの機会なのでこういうご

当地ものを食べるのは結構大切な気がする。顧問の村田先生も現地の土地を歩き、地元の食べ物を食べるというのが地理学徒の基本だと言ってたし実際そうなのでしょう。

そして、今日の見学地は一通り見終わり、ホテルに向かうことになった。(ホテルアマネク金沢というビジホです)この日も相変わらずめちゃくちゃに暑かったので、私たちは早くホテルに入りたくて仕方がなかった。そして、バスで移動し、到着。前回の春合宿は日光、昨年の夏合宿は松島(宮城)の民宿だったので、築2年のビジホの綺麗さには感激した。もちろん、昔ながらの民宿にも良さは沢山あるが、ビジホはやっぱり落ち着くものだ。そして、夜ご飯は、高一部員5人で、麵屋鶯(うぐいす)という醤油ベースのラーメン屋に行った。最初は大将とカウンターで話すタイプの結構敷居が高めの寿司屋に行く予定だったが、流石に我々には金銭的にもコミユカ的にも厳しいということで、ラーメン屋になった。ここは、金沢市内のラーメン屋では1番評価が高く、地鶏など地元石川の食材をフルに活用していて、醤油ベースのスープ、麵、多彩な具どれをとっても1級品で、期待通りだった。YouTubeで麵屋鶯と調べると当店のレビュー動画も沢山あるので良ければ見て欲しい。

そして、食べ終わったあとホテルに戻り、最後に、ミーティングという今日の総括のようなものをして、あとは大浴場で入浴し、疲れた体を癒すべくして眠りについた。初の高一主体の活動であつたが、ハプニングがありながらも全部の見学場所を巡れ、全員無事に終わったので、良かった。9月には弊社にとって最大のイベントである文化祭も控えているので、今後とも活動に精進したいと思う。

2日目 文責：榎本 眞鑑

新井班の2日目の行程は、午前には武家屋敷巡り、金沢能楽美術館、加賀友禅会館、午後に内灘砂丘。

午前の散策。9時過ぎにホテルを出発して、早速予定を午前午後を入れ替える地理部らしいハプニングに見舞われながらも15分くらい歩いて野村家武家屋敷に到着。15分くらい歩いただけで結構な量の汗をかいて正直最後まで持つか不安になりながらもしっかり見学をして次の金沢能楽美術館に向かった。美術館に向かう道中では金沢が城下町であることが窺える建造物(?)があつたので紹介する。(偉そうに言ってますが、正直顧問に言われるまで全く気づきませんでした)



【写真：真っ直ぐに進めない】

筆者は昔ながらの綺麗な街並みだとしか能天気を感じていませんでしたが、実はこの街の道はほとんどの曲がり角が直角で馬が全速力でカーブを曲がりきれない特性を活かして敵の足止めとなる工夫が施されてあった。以前巡検した川越にも似たような工夫があったが学んだことを活かさず自分はまだまだだと痛感した。



【写真：般若の面】

そして、金沢能楽美術館に到着した。ここからは館内で受けた説明の受け売りだが、そもそも能は狂言と違い悲劇的な題材が多く神様や幽霊を主人公にする演目が多いことが特徴だ。金沢では加賀宝生(石川県の伝統芸能である宝生流の能楽)が盛んだそうだ。また、ここでは面(おもて)を被る体験をした。筆者は般若(女性の怨霊を表現する面)の面をイケテルという単純な理由から選んだ。面をつける際には神様への礼を欠かしてはならず、面の金色の目には神が宿っており、面に対してきちんと一礼をしてからつけてもらった。面には顔のちょっとした角度で面の表情の見え方が変わるよう施しがあると教わり、彫り師の技術の高さと面の深さを実感した。面を実際につけてみて感じたことは視界がとても狭く足許も見えない中で演者の方は『舞』を披露

しているのは瞠目すべきものだと感じた。実際、演者は目付柱という舞台にある4本の柱で自分の位置を把握して舞台上で演じている。

次に加賀友禅会館に向かった。美術館から加賀友禅会館まで炎天下の中の徒歩移動で正直しんどかった。ここでは着物や小物などを鑑賞した。素人目でも分かるくらい綺麗であでやかであった。

加賀友禅会館からバスで近江市場まで向かい、市場に到着したら班員は解散して各々昼食をとった。筆者は同じ高2とブラブラ散策して昼食をとった。散策して思ったのは市場には外



【写真：左はお昼のお寿司／右は近江町市場】

国人観光客が結構来ており、混んでいるなと思った。また、店頭では新鮮なウニやエビなどが売られていて美味しそうだった。(高くて食べれなかった…) 昼ご飯は市場内のお寿司屋さんでノドグロの食べ比べを食べた。やはり、普段よりも新鮮で身がぷりぷりでとても美味しかった。この後、班員と合流して金沢駅へ向かい電車で内灘に向かった。

まず筆者が金沢駅に到着して驚いたのは慣れない改札だった。改札は下の写真の通りで銀の柵(?) みたいなところに駅員さんが立って手動で切符に押印するというものだ。この昔の方式は東京であまり見かけないもので新鮮で楽しかった。電車は二両編成で短く、乗客のほとんどは学生だった。のどかな地域を走り続けて 30 分くらいして内灘に到着した。内灘駅周辺はバス停とロータリーに大通り以外建物などはなかった。ここから 15 分くらい歩いて内灘砂丘の方へ向かった。砂丘にはまあまあな台数の車が浜辺に止まっておりバーベキューや泳ぎを楽しんでいた。筆者も足が浸かるくらいのところで海水で体を冷やした。砂丘周辺には大きな幹線道路とイオンモール



【写真：金沢駅のレトロな改札】

(少し錆れてる) があるくらい特に目立った建物はなく車の音と波の音しか響いてなかった。ただ、砂丘周辺には浜堤と呼ばれる波に打ち上げられたことによって運ばれた砂や礫が堆積してできた少し盛り上がった地形があると顧問から教わり地理部らしいことを学べて筆者は満足だったとか。帰りは流石に暑さにやられて疲れたのでコミュニティバスに乗って内灘まで向かい電車で金沢まで戻りホテルに帰った。



【写真：左は内灘砂丘と海／右は浜堤 内灘砂丘を背に撮影しており若干坂になっている】

ちなみに、顧問からの受け売り情報だが、内灘砂丘の成り立ちは少し特殊で砂が対馬海流によって運ばれて能登半島にぶつかりそれが戻ってきて堆積してできたものだそう。砂はぶつかったことで他の砂丘よりもより細くなるので密度が大きくなり浜辺も固くなるので車がスタックせず浜辺に駐車できるそう。

最後に、本稿の執筆を致しました地理部部長の榎本です。今回の合宿を通して主に金沢の伝統、歴史について学びました。やはり授業や教科書を見たり聞いたりして学ぶよりも実際に足を運んで現地を見て実感することの方がより理解や興味が深まることが多いと私は思います。実際、歩いて浜堤を登って下って浜堤はこういうものだとは再確認したり城下町の街並みを炎天下の中歩いたりすることだっというやでも忘れることができないうです。地理部では4年半という短い間ですが部長という職含め色々なことを学びました。一時期(昨年度)は中学地理部廃部の危機に直面してましたがなんとか持ち堪えて今後も仲間と楽しく地理と旅行を楽しんでもらえたらなという風に思っています。拙い文章ではありますがご一読いただきありがとうございます。

6. 新入部員 初めての夏合宿

旅行記 文責：橋本 弓彦

地理部でたった一人しかいない、城北高校に入学して3,4ヶ月の高入生である私が2泊3日の「金沢夏合宿」の旅行記を担当することとなった。金沢といえば、日本三名園の兼六園や伝統工芸品の金箔などなどが有名であり、北陸地方最大とも言われる都市である。また今年の正月に発生した能登半島地震の影響も受けた場所でもあり、様々な面で今注目されている都市である。

初日(7/31)、東京駅構内で駅弁を買い、集合場所の動輪の広場へ向かうが地下にあるとは知らず、早速迷う。無事集合した後東京駅から北陸新幹線かがやき523号金沢行きに乗車し、駅弁を食べつつ2時間半ほどで金沢駅に到着。ここで、2班に分かれそれぞれが計画した通りに金沢を巡った。

私たちの班は金沢駅からひがし茶屋街まで行きひがし茶屋街の喫茶店で涼んだ後、主計町茶屋街(かずえまちちゃやがい)を巡った。右の



【写真：左は鼓門/右はひがし茶屋街/下は主計町茶屋街】

写真を見るとわかる通り茶屋街の建物は木造建築であったり、道が石畳だったりして趣が感じられる。また、自動販売機が周り合うような茶色で塗られているものもあり、景観に力を入れているようだった。主計町茶屋街の後の近江町市場では海鮮が多く売られ海の匂いが漂う中徘徊した。その後時間がある限り、にし茶屋街、



妙立寺（忍者寺）を巡り、ビジネスホテルで1日を終えた。茶屋街はひがし茶屋街が最も広く、国内外から来ている客で賑わっている様子だった。

2日目の活動は初日と同じ班で金沢市内、市外と行動範囲を広めて行われた。最初は森八（本店）で「落雁」を作る体験をした。「落雁」とは、もち米粉や和三盆糖を型に押し固めて作られる菓子である。西アジア、中央アジア、中国から日明貿易を通じて室町時代に伝えられたのだと言う。午後になると、



【写真：落雁と抹茶】

兼六園と金沢城の見学を開始した。兼六園には梅など花も含め多くの植物が存在するが、今の時期は主に松の緑が目にと焼き付けられた。金沢城公園には石川門口から入り、橋爪門続櫓や菱櫓、五十間長屋の中を見学し、菱櫓の建物の形や柱までもが菱形でできているなど金沢城ならではの特徴を学べた。見学を終えた後、ひがし茶屋街近くにある金沢市立安江金箔工芸館で金箔の歴史や製法、金箔を利用した芸術、工芸品を見て学べた。



【写真：左は兼六園の霞ヶ池／右は金沢城の橋爪門】

その後は金沢駅を起点とする北鉄浅野川線に乗車し、内灘町の内灘砂丘・内灘海岸に訪れた。きめ細かい砂が広がる日本で3番目の大きさの砂丘から、日本海や能登半島も望むことができた。夕食は金沢駅から少し歩いたラーメン屋で済ませた。金沢らしいといえば怪しいが、魚介の味が良いアクセントのコツテリとしたラーメンだった。



【写真：左は内灘海岸から日本海を望む／右は濃厚背脂豚骨拉麺 極豚】



【写真：930E(手前)&PC4000(奥)】

最終日、午前からお世話になったホテルを離れ、金沢駅にて金箔が乗った羽二重餅をお土産に購入した。お土産といえば、顧問の村田先生から伝授して頂いたことだが、地方のコンビニやスーパーで売られている地域限定の商品は良いお土産となるそうだ。今までお土産は空港や駅、高速道路のSA、PAで買うものだという先入観があり、まさに目から鱗な情報である。さて、金沢駅でお土産を

買い、部員全員が集合した後はIRいしかわ鉄道に乗車し、小松駅近くの「こまつのだ」に行くこととなっている。「こまつのだ」は建設機械を製造する小松製作所(コマツ)の工場の跡地に建てられ、入ってすぐに大型の重機2台が迎えてくれた。産業の基盤を支える企業の理念、歴史などが学べた。見学終了後、昼食に西日本に多く出店される二郎系ラーメン「夢を語れ」小松店を訪れようとしたものの、Googleマップの「営業中」という情報に騙され、暑い中片道12分を往復させられた。その後小松駅高架下のカレー店でとんかつカレーを頂いた。

再び小松駅に集合した後、北陸新幹線つるぎ22号富山行きに乗車し、富山駅で北陸新幹線かがやき534号上野行きに乗車。上野駅にて解散、夏合宿は無事に終了した。初めての合宿で且つ、高入生一人という中で多少の苦労はあったものの、楽しむ、学ぶことができ非常に有意義な3日だったと思う。

金沢合宿について 文責：高 隼人

今回の学習は僕にとって初めての夏合宿だった。今回の旅で楽しかったこと、興味深かったところは何といってもバスだ。金沢の街にはたくさんのバス路線が走っている。3分に一回ぐらいのバスが来るが、ほとんどのバスは目的地とは違うところに行く。そのため自分たちにはよくわからなかった。外国人はもっと悲惨だろう、現地の人が教えてくれなかったらどうなっていたのだろうか？想像を絶する。もう一つ興味深かったのは金沢に來ている外国人の多くはヨーロッパの人たちだったということだ。日本人を含めアジア人がかな



【写真：金沢駅の鼓門】

り少なかった。先生の話によるとヨーロッパの観光ガイドで日本に行く際必ず行くべきところに金沢が指定されているとおっしゃっていた。そのためホテルに宿泊している日本人は我々だけだとも思うぐらい外国人が多かった。これはこれで面白かった。



【写真：兼六園の橋】

今回の学習で一番反省するべきところは兼六園で30分迷子になったことだろう。兼六園には7,8個の出入り口がありどこから入ってきたのかがわからなくなった。こういう時に地図を見るべきなのにも関わらずひたすら歩いてしまった。地理部なのに地図を使わないという行為がとても恥ずかしかった。次からは地図を見るなり従業員に

助けをこうなりして迷子にならないようにする。

金沢駅の鼓門に行く前に調べた。今回実物を見て鼓門の仕組みを調べた。鼓門は太い柱に細い木をまげて丸めるようにおおっていた。その上に木でできた屋根を載せているという設計だった。いたってシンプルだが圧巻だった。個人的には雷門よりも美しいと思っている。これがイルミネーションされる姿をいつかは見てみたい。

自分たちの班は森八で落雁体験をした、落雁は粉でできているということを初めて知った。落雁は型の中に粉を入れそれを押して作る。ちゃんと押さないとすぐに壊れてしまうため家に持ち帰ったころにはほとんどすべて粉になっていた。落雁が正しく固まるには水分が必要である。水分がないと固まらず粉になってしまうため後半はほとんど固まらなかった。この森八さんが作っている落雁は日本三大銘菓だそう。しかも落雁の型を作る職人が今2人しかいないため、昭和の型を今でも使っている。こうやって伝統が廃れていくのだなと思いました。

金沢の周辺の海岸に行った際大量のプラスチックが落ちていた。日本海は中国や韓国からごみが流れてくるだろうと思っていたが、本当にプラスチックが大量にあった。カモメがごみの近くにいたため食べないか心配になった。海洋プラスチックの被害はとても深刻だ。自分もごみ分別を徹底しようと思う。



【写真：金沢市周辺の海岸のようす】

夏合宿の感想 文責：永田幸寿

1日目、ひがし茶屋街、主計町茶屋街へ行った。茶に関する商品が多く、中には金沢でよく生産される金箔が入っている食べ物もあった。

石川県立歴史博物館では、加賀藩の大名行列の様子を学んだ。参勤交代は加賀から江戸までを歩くのに12日かかり、1日に約40km歩くと知り驚いた。

兼六園では噴水や霞ヶ池、灯籠などを見た。草木が生い茂り、美しい景観が広がっていた。



【写真：ひがし茶屋街の街並み】



【写真：左は兼六園の噴水／中は池を泳ぐ鯉／右は霞ヶ池と灯籠】

夕食後、ミーティングが開かれ、先生から今日見学した場所の説明を受けた。



【写真：コマツの重機】



【写真：野村家庭園のようす】

2日目、武家屋敷跡野村家では、野村家に伝わる刀や甲冑、庭園などを見た。

昼ご飯は近江町市場で解散し、別々に行動しました。

3日目、こまつの社を見学しました。コマツの重機が大きく、驚いた。

金沢旅記 文責：牛田 健心

1日目、7月31日（水曜日）9時20分東京駅動輪の広場集合。9時56分かがやき523号に乗り、金沢へ出発。金沢駅に12時30分に到着。

13時5分尾山神社到着。尾山神社ではまず冷たい水で手を洗いお参りした。水はとても冷たく、とても気持ちよかった。神社では次のテストで良い点数を取れるように願った。その後は、緑が反射した池の上を歩いた。自然が感じられ気持ちよかった。木々がたくさんあり、涼しい気持ちになった。



【写真：尾山神社の池】

13時45分兼六園到着。とても広大な土地の中に木々や緑がたくさんあり、日陰もたくさんありとても落ち着いた。兼六園では、僕はラムネジュースを買い、飲んだ。暑い中だったのでとても美味しく感じた。僕は虫が嫌いだ、ここにはほぼ虫がいなくとても過ごしやすかった。

15時40分東茶屋街到着。ここでは、一休みとして白玉あんみつを食べました。少し冷たくて、またお店の雰囲気とマッチしてとてもリラックスできた。

16時45分ホテルアマネク到着。部屋に入ってテレビを見た。また友達の部屋に入ったりもした。しかし、その時部屋にカードキーを置いてインロックしそうになったり忙しい場面もあった。その後は夜ご飯を食べに行った。その日は8番ラーメンの餃子を食べた。少し熱かったがとてもおいしかった。部屋に戻って、他の友達が帰ってくるのを待った後はみなでお風呂に入りに行った。お風呂は少し熱かったが、1日の疲れを癒せた。その後は少し部屋で遊んだりしてそのまま就寝した。とても良い1日だった。



【写真：兼六園】

2日目、9時にホテルを出て、武家屋敷跡野村家に行った。ここでは昔の雰囲気を味わいながら、外の景色を見てゆったりした。その後は加賀友禅会館に行って加賀友禅について学んだり、広坂21世紀美術館に行っておめんや劇の映像を見たりして、休憩しながら学んだ。

また、お昼ご飯は近江市場に食べに行った。僕は少し高かつ

たが、お寿司を食べた。ホタテはとても大きくて食べ応えがあり、サーモンは口の中で濃い味わいが広がった。ウニは新鮮な風味がし、高くても納得の味だった。特に1番おいしかったのは、マグロで口の中でとろけて少し甘い味わいもありながらも醤油とマッチしとてもおいしかった。

次は内灘砂丘に行きビーチを見た。とてもきれいな海が目の前に広がっており、とても感動した。そこでは友達とどこまで行けるか競争したり、枝を海のほうに刺したりして遊んだ。とても楽しかった。



【写真：内灘砂丘】

ホテルに戻り夜ご飯を食べに行った。その日もまた8番ラーメンに行った。今度は餃子を食べずにラーメンを食べた。家ではラーメンにあまり野菜を乗せませんが、ここではたくさん野菜が乗っていて、また別のおいしさを見つけた。とてもおいしかった。

3日目、二日間お世話になったホテルを出て、金沢駅に着き、小松駅に11時3分に着いた。小松駅のすぐ外にある「こまつの杜」を11時30分から1時間見学した。そこでは大きな重機がたくさんあったり、機械がどう動くか詳しくわかる場所があったりした。

その後の昼食では、カレー屋さんでチーズカレーを食べた。初めて食べるカレーの種類だったが、意外とチーズとカレーがマッチしていて、いつもとは違う別のおいしさがあった。17時28分に上野駅で解散となった。

〈参考文献〉

金沢市公式 HP <https://www4.city.kanazawa.lg.jp/index.html>

文化財指定庭園 特別名勝 兼六園

<https://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kenrokuen/>

兼六園観光協会公式 HP <https://kenrokuen.or.jp/>

金沢城公園公式 HP <https://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou/>

金沢市立安江金箔工芸館 HP <https://www.kanazawa-museum.jp/kinpaku/>

箔一ゴージャスな金箔を深く知る～金沢市立安江金箔工芸館

https://kanazawa.hakuichi.co.jp/blog/detail.php?blog_id=120

金沢日和 https://www.kanazawabiyori.com/spot/spot_15281.html

金沢中日新聞 <https://www.chunichi.co.jp/article/674186>

金沢旅物語 https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/spot/detail_10062.html

旅色 <https://tabihiro.jp/leisure/s/208076-kanazawa->

[kanazawashiritsuyasuekimpakukogeikan/](https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/spot/detail_10062.html)

内灘町公式 HP <https://www.town.uchinada.lg.jp/>

金沢大学学術情報リポジトリ <https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/>

こまつの杜 <https://komatsunomori.jp>

https://kanazawa.hakuichi.co.jp/blog/detail.php?blog_id=21

<https://www.isitabi.com/kanazawa/higasi.html>

https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/article/detail_76.html

https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/spot/detail_10199.html

https://www.hot-ishikawa.jp/spot/detail_6027.html

<https://ohmicho-ichiba.com/>

https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/gourmet/detail_10030.html

<https://wadachinmi.co.jp/news/>

https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/spot/detail_10003.html

https://www.hot-ishikawa.jp/blog/detail_319.html

<https://www.hachiban.jp/>



第二章

春合宿～栃木県の地域性

「日光・足尾」

(2024年3月27～28日)



1. 日光市 概要

文責：池田 鴻平

日光市は栃木県の北西部に位置し、北は福島県、西は群馬県に接している。日光国立公園地域を中心とする山間部の多くは、水源かん養や自然環境の保全等の機能を担う振興山村地域に指定されている。地形は標高 200 メートル程度の市街地から 2,000 メートルを超す山岳地域まで大きな起伏があり、四季によって変化に富んだ観光・スポーツ・レクリエーションが可能になっている。気候は内陸性気候に属し、年平均気温は市街地で 12℃程度、山間部では 7℃程度であり、夏季は比較的涼しく、冬季は氷点下になることも多い。

日光市は平成 18 年 3 月 20 日に 2 市 2 町 1 村の合併により誕生した都市で、合併後は豊かな自然環境と貴重な歴史的・文化的遺産、湧出する豊富な温泉などの観光資源を基盤として大きく発展してきた。

日光市は 17 世紀はじめに徳川家康公の霊廟として日光東照宮が建立された後は、旧今市市は日光街道・例幣使街道・会津西街道の結節点の宿場町として、旧日光市は二社一寺の門前町として栄えてきた。さらに 17 世紀末に鬼怒川温泉が、18 世紀初頭には川治温泉が発見され、日本有数の温泉保養地としても発展してきた。

また足尾銅山は、16 世紀に銅が採掘されていたと伝えられ、その後、日本を代表する銅山として栄え、日本の近代化に大きな功績を残した。

2. 宇都宮市 概要

文責：池田 鴻平

栃木県中央に位置する都市であり、栃木県の県庁所在地としても知られている。市の東部を鬼怒川が流れて平野部が広がる一方、北西部には戸祭山、八幡山、二神山がそびえている。内陸のため気温の変化が激しく、冬の冷え込みは北関東の県庁所在都市の中で最も厳しいという特徴を持つ。市内には大規模な工業団地が整備され、関東地方屈指の工業都市となっている。路線バスを中心に公共交通が発達し、市内の移動がとても便利になっている。近年、宇都宮餃子が全国的に有名になっている。

宇都宮市は元来、工業が盛んな市として有名で、2018 年の宇都宮市の製造品出荷額は 2 兆円を超え県内 1 位を誇り、北関東でも有数の工業地帯として有名である。分類別では機械器具や飲料・食品、化学工業品が大きな割合を占めていて工業都市としての生産レベルが高く、宇都宮市は典型的な内陸型製造産業として発展した。鬼怒川の東岸では国内最大級の規模で機器部品やたばこ、食品などの大規模工場が置かれている。また、宇都宮工業団地は 1962 年頃から稼働していて、総面積は 300 万 m²、100 を超える製造企業が籍を置いており、非常に規模が大きい工業団地となっている。

3. 足尾銅山

文責:榎本 眞鑑

地理部では春合宿の初日に足尾銅山を見学した。場所はわたらせ渓谷鐵道の通洞駅で周辺は何軒か建物はあるものの人通りは少なく閑散としていた。

足尾銅山では江戸から昭和への時代の移り変わりとそれによる採掘環境などの変化を展示を通して学んだ。本レポートでは、それらについて学んだこと感じたことをまとめた。



【写真：上は乗ったトロッコ／下は通った線路】

山内では採掘を行う「堀り大工」や運搬を行う「手子」、「負夫」などの作業を分担して採掘が行われた。しかし、いずれも手作業であったため環境はとても辛く厳しいものであった。次の展示は明治・大正時代の展示である。明治時代に入ると足尾銅山は「古河市兵衛」により民営化され、電化や近代化が進められ急速な発展を遂げた。また、その後すぐに日本の銅の40%が産出されるようになったものの、「公害」が発生して周辺地域に多大な被害を与えた負の一面もある。やがて、大正時代に入ると「足尾型鑿岩機(さくがんき)」が考案され手掘りから機械掘となり作業効率が大幅に上がった。また、桐生～足尾間に鉄道が建設され馬車に変わる新たな輸送手段が生まれた。

まず、実際に使用された坑道をトロッコに揺られて入坑した。

坑道内は外よりもだいぶ涼しく水も滴っていた。トロッコは、降りた場所が今では終点となっているが銅山が開いた頃は、これより先に1200kmも坑道が続いており、それは大体、東京～博多までの距離となっている。しかし、ここより先の坑道は一般の人は立ち入り禁止となっている。

トロッコから降りたらまず江戸時代頃の銅山の様子が展示されている。銅山は足尾の2人の農民によって発見された。のちに幕府直営の銅山として代官所が設置された。銅

最後の展示は昭和時代の様子と使用されていた機械や装置、製錬の様子についてだ。

昭和時代に入ると明治・大正時代以上の合理化が進められ「新式鑿岩機」や発破を利用した採掘がされるようになった。また今まで無視されていた労働環境の改善にも取り組まれるようになった。発破を利用した採掘では採掘された



【写真：鑿岩機を使っている様子】

鉱石を「鉱車」と呼ばれるもので選鉱所へと運ばれた。製錬所では「重液選鉱法」や「自溶製錬法」といった最新技術を日本で最初に取り入れており技術の面で大いに貢献した。



【写真：鉱車①】

左の写真は坑道内に敷設された鉄道で国内初の電気鉄道として「本山～製錬所」を結んでいた。これにより作業効率は大いに良くなった。

厳しい状況が続く中、銅山を経営していた古河鉱業が鉱源の枯渇や世界的な銅価格の低下などを理由に、やがて、閉山を迎えた。



【写真：鉱車②】

《銅山が与えた影響》

足尾銅山の最盛期には地域が賑わった反面様々な負の影響があった。

銅山の繁栄に伴い労働者と労働者の家族らが押し寄せた。当時、町には映画館や劇場が並び、銅山で働く人々のための住宅や生協などもあった。その名残として実際、足尾で昼食を取った店は銅山が鉱業してる時から店を開いておりメニューの



【写真：反対を求める看板】



【写真(上/下)：現在の足尾の町】

鰻の味付けはしょっぱく鉱夫を思い遣った味付けとなっていた。1918年には3万8000人近くの人が銅山周辺に住んでいたそうで宇都宮に次ぐ人口だった。(銅山が閉山した今では人口が1000人を切ってる)。

1930年代に入ると他の銅山は第一次世界大戦後の景気後退により閉山するも足尾銅山は堅実に生産を続けた。銅山の繁栄は街を活性化させたものの様々な環境被害をもたらした。具体的には漏れ出した鉱毒が水に溶け毒水として渡瀬川に流れ洪水で広範囲に渡る地域の土を不毛にし農業ができない状況にしたり川の魚を死滅させたりしたというものだ。これに対して住民は銅山の鉱業停止を訴えたものの取り合ってもらえないということもあった。また、閉山の決定も急で労働者だけでなく町民も経済的な打撃などに対しての不安に揺れた。今では、もう人通りもなく店も閉まっている。

《今回の見学を通して》

足尾銅山の見学を通して時代が進むにつれて目まぐるしい発展で地域や産業を活性化する一方で利益を追い求めるあまり周囲に与える影響に興味を持たず(閉山の対応も含め)取り返しのつかない事態にまで発展し、信頼を失ってしまったことに目の当たりにして産業の発展には地域との関係性は必要不可欠であると改めて感じた。

4. わたらせ溪谷線

文責：田畑 裕理

わたらせ溪谷線は群馬県桐生市から栃木県足尾町までをつなぐローカル列車である。元々、足尾銅山から抽出した銅を輸送するために敷設された鉄道が、現在の「わたらせ

溪谷鉄道」の始まりである。そのため、大正時代から足尾の足として親しまれており、全盛期には大間々駅周辺に関東一のテーマパークと歌われた「ながめ遊園地」ができるなど、多くの人々が利用し賑わいを見せていた。しかし、昭和10年代以降になると銅の生産量も落ち始め、徐々に勢いが落ちていき沿線住民の生活路線として利用されるようになった。平成になると今までの生活路線としてのスタンスを一変し、「わたらせ溪谷鉄道」として再スタートを切る。沿線町村は観光施設や、足尾銅山の観光地化などができた。鉄道事業も従来の生活路線に加え「お座敷列車」や「トロッコ列車」などさまざまな試みが行われた。



【写真：わたらせ溪谷鉄道相老駅】

このようにわたらせ溪谷線は、一度は衰退したものの「鐵道文化遺産」の魅力を発信して、沿線地域の”レトロ”な部分を売りにし見事、復活を遂げたのである。実際にわたらせ溪谷鉄道に乗ってみた感想としては、車窓から見える川の景色や山々の雄大な姿を望むことができ、いい意味での古臭さを感じられる経験となった。

5. 二荒山神社

文責：水谷 颯

二荒山神社は本社、中宮祠、奥宮の三社からなり、その歴史は八世紀の奈良時代まで遡る。男体山を中心とした日光連山は、古くより神の住む聖地としてあがめられており、奈良時代の終わりごろ、男体山の頂上に、勝道上人によって祠が築かれた。これが現在の奥宮の始まりであり、その後中宮祠が男体山のふもとに、本社が人里に近い山内に建てられた。二荒山神社は、下野国一之宮として地域の人々の信仰を集めてきた。二荒山神社の主祭神は招福や縁結びの神様、大己貴命で、現在では縁結びのご利益で人気の神社となっている。

《二荒山神社の神橋について》

日光山内の入り口にかかる木造朱塗りの美しい橋で、奈良時代の末に勝道上人が日光山を開く際、大谷川の急流に行く手を阻まれ神仏に加護を求めたところ、深沙王が現れ2匹の蛇を放ち、その背から山菅が生えて橋になったという伝説を持つ神聖な橋となっている。別名山菅橋や山菅の蛇橋とも呼ばれている。現在のような朱塗りの橋になったのは寛永13(1636)年の東照宮の大造替時とされている。しかし明治35(1902)年にそ

のときの橋は洪水で流されてしまったものの、明治 37（1904）年に再建され、日本三大奇橋の 1 つに数えられている。



【写真：二荒山神社】



【写真：大谷川に架かる神橋】

6. 輪王寺

文責：遠藤 壮一郎

日光山輪王寺は天台宗の寺院で、日光東照宮、日光二荒山神社と合わせた「二社一寺」として国の史跡に指定されており、また、「日光の社寺」として世界遺産にも登録されている。

奈良時代の末に、勝道上人によって日光山は開かれ、輪王寺は日光二荒山神社と共に山岳信仰の社寺として創建された。江戸時代には、天海大僧正が住職となり、天台宗の教えで徳川家康を東照大権現として日光山に迎え祀った。当時は「満願寺」という名前で、1655 年に後水尾上皇より「輪王寺」の寺号が下賜され、さらに天海大僧正や三代将軍徳川家光が新たに祀られ、「日光門主」と呼ばれる輪王寺宮法親王が住し、宗門を管領することになった。特に徳川家光の信仰は厚く、大雪で倒壊した本堂が家光公の命で再建されたり、没後は家光公を祀った大猷院霊廟が置かれたりしたことから、その関係の深さを感じることができる。法親王は 14 代を数え、幕末に及んだ。明治になり、神仏分離の荒波を超えて現在の「輪王寺」がある。



【写真：輪王寺大猷院二天門】

現在、日光山輪王寺は本堂（三仏堂）、大猷院、慈眼堂などのお堂や 15 の支院で構成されている。日光山輪王寺の本堂にあたる「三仏堂」は東日本で最も大きな木造建築物で、国の重要文化財に指定されている。現在の建物は 1645 年に徳川家光公によって建て替えられ、その後幾度かの修復を経て 2007 年から 2018 年にかけて 10 年余りにわたる大規模な修理が行われた。外柱の端から端までの長さは約 34m もある。

7. 大谷石資料館

文責：野口 琉也

大谷石資料館は栃木県宇都宮市にある大谷石の採掘場跡に設立された資料館である。ここでは大谷石が採掘されてきた坑内地下空間を見学することができたり、採掘の歴史を学んだりできる。以下にはこの大谷石資料館で見学したことをまとめた。



【写真：大谷石資料館】

《大谷石とは》

大谷石とは宇都宮北西部の大谷一帯で採れる緑色凝灰岩のことで、耐火性に優れ、石質が柔らかいという特徴がある。その加工しやすい特徴があるため、江戸時代から建材として本格的に採掘され始めた。大谷石が使われている有名な建造物としては、旧帝国ホテルや松が峰教会などがある。

大谷石のでき方には様々な学説があるが、最も有力な説は今から 1500 万年前の日本列島の大半が海中にあり、一部しか水面に出ていなかった時代に地表面の裂け目から流紋岩質角礫の砂礫や火山灰が海中で凝固してできたというものである。

《大谷石採掘の歴史》

先ほど述べたように、大谷石が本格的に採掘され始めたのは江戸時代の中期からである。その歴史の中で採掘方法は手掘りから機械掘りへと変わってきた。

①手掘りの採掘

江戸時代中期から昭和 34 年頃まではツルハシを使った手掘りでの採掘が行われていた。この採掘方法

では六十石(18cm×30cm×90cmの石)を一本掘り出すのに 3600 回も腕を振ったと言われている。そのため、一日に一人で採掘できる量は約 12 本であった。また、採掘された 80kg 以上もある石を背負子という道具を使って採掘場から運搬する仕事もあり、これは小出しと呼ばれる人々によってされていた。



【写真：大谷石の岸壁】



【写真：採掘に使われていたツルハシ類】



【写真：手掘りの跡】

右上の写真は実際に坑内地下空間内にある手掘り採掘の跡である。石を横に切り出す平場掘りがされたために表面に横線模様が見られる。

②機械掘りの採掘

昭和 27 年に協同組合内に機械化研究会が設けられて機械が試作されたのを機に大谷石採掘の機械化が考えられるようになってきた。昭和 29 年には県の補助金を受けて組合裁断加工場が設置された。その後、組合に代わって個人が機械を持つようになった。そして、昭和 35 年には大谷地区での採掘が完全に機械化された。これにより一日に一人で採掘できる量は 50 本ほどに増えた。現在に至るまでに石を裁断する機械は著しい進歩を遂げ、垣根掘り、平場掘り、裁断、化粧削りができるようになった。また、運搬する作業においても機械化され、モーター利用のウインチ策道によって巻き上げられて運び出されている。

右の写真は実際に坑内地下空間内にある機械掘りの跡である。機械化初期に丸鋸式平場採掘機で切り出した縦のみぞが見られる。



【写真：チェーンソー採掘機】



【写真：機械掘りの跡】

このような大谷石の採掘に関する文化は 2018 年に文化庁によって日本遺産にも認定された。

《坑内地下空間(採掘場跡)の様子》

大谷石資料館の地下採掘場は大正 8 年から昭和 61 年までの約 70 年にかけて大谷石を掘り出して作られた巨大地下空間である。現在ではコンサートや美術展、写真や映画のスタジオなどに使われている。その坑内の展示物で特に印象に残ったものをあげていく。

①立坑

坑内の天井を見ると立坑と呼ばれる地上まで掘られた穴がある。これは坑内の位置が地表面のどのあたりに来ているのかを把握するために掘られた。



【写真：立坑】



【写真：輪王寺大猷院二天門】



【写真：坑内地下空間】

②天然の冷蔵庫

坑内の平均気温は 7℃で、冷蔵庫の室温とほとんど変わらない。そのため昭和 45 年には約 90000 俵の政府米が保管されていた。現在でも野菜や果物、ワイン、日本酒の貯蔵庫として利用されている。

③石の華

坑内の壁の表面には白い結晶が付着している。これは大谷石に含まれる塩分が冬の乾燥した時期に噴き出るもので大谷石資料館では石の華と呼んでいる。夏場の湿った壁では消滅する不思議な現象である。



【写真：石の華】

8. 栃木県立博物館

文責：田畑 裕理

栃木県立博物館は栃木県中央公園内に位置する、国立博物館である。展示内容は大きく、三つに分けられている。

一つ目が、自然系である。主に日光地域の食性や生態系をまとめた展示となっている。特筆すべき点はスロープ展示になっている事である。スロープ展示にすることによってスムーズに展示内容を見ることができ、導線で迷うこともなかった。また、奥行きを感じさせる展示も工夫が施されているだろう。これによって自然の雄大さが視覚効果としてわかりやすく表れ、見るものに大きな関心を与えた。

二つ目が地質時代から現在に至るまでの展示である、歴史系である。地質時代についての説明では宇都宮市郊外で有名な「大谷石」についての説明も見受けられた。また、資料室に入ってすぐに大きな恐竜の骨格模型があり迫力があつた。人文系の歴史に関しては、縄文土器や土器を抱えたまま亡くなった人（実物）などがあつた。貴重なものだと、重要文化財に指定されている銅印などが見受けられた。

三つ目が企画展をメインとする展示である。ここでは年に3回の企画展が行われ、どれも見る人の目を惹くものばかりだ。私が訪れた時には、「下野薬師寺と龍興～鑑真和上とゆかりある名刹～」が開かれており、貴重な鑑真和上直筆の巻物などがあつた。また、別の企画展ではコガネムシについて栃木にいるコガネムシ130種類を標本にしている展示もあつた。どちらもなかなか、他では見られないものばかりで貴重な体験をしたと実感している。



このように、栃木県立博物館は国立の地方博物館ならではの展示工夫も見ることができ、非常にわかりやすい展示ばかりだった。

【写真：左は奥行きを感じさせる展示／右は大迫力の恐竜の骨格標本】

9. 宇都宮城址公園

文責：榎本 眞鑑

宇都宮城址公園は、栃木県宇都宮市本丸町にある宇都宮市立の都市公園である。災害時避難場所に位置づけられ、防災公園にも指定されている。宇都宮城の本丸西半分が復元されており豊臣秀吉が戦国時代を終結させたり歴代の徳川將軍の宿泊地であったりと歴史的にとっても意義のある場所である。



【写真：清明台櫓】

《富士見櫓》

天気が良い時に街を一望でき、富士山が見えることが由来。公園はとても広く子連れや子供たちが遊んでいた。園内には河津桜が咲いており、綺麗だった。

《清明台》

公園の周りの堀の土塁の上に位置する櫓（やぐら）である。清明台が位置する土塁は、他の部分よりも高い位置にあり天守閣の役割を果たしていたと考えられている。



【写真：河津桜と富士見櫓】

10. 大谷景観公園・多気山

文責：薛 文森



【写真：大谷景観公園】

《大谷景観公園》

岩彫りされた大谷観音から5分ほど歩いた姿川沿いにある公園。大谷石がむきだしになった岩壁が大迫力で、国指定名勝ともなっている。岩壁が長く続いており、写真右側の奇形のような岩などを見つけることや名前がついている岩がその名の通りにみえるか考えるのも面白いでしょう。公園は芝生で椅子とテーブルもあり、

春や秋では岩壁を眺めながらピクニックするのも良い。しかし真夏の炎天下は日陰がないので注意が必要になる。

《多気山(たけざん)》

標高 376m の低山で不動尊まで上りが 30 分程度、下りは-20 分程度かかる。また、筆者が時間の都合で、山頂から走って下山したら 5 分もかからないほど、家族連れでも簡単に登れる。山頂から宇都宮市を一望でき、東側筑波山や、天気の良いときは東京スカイツリーなどが見られる。山一帯が広葉樹林や針葉樹林の高木に覆われ、ヤシオツツジが群生し、開花期である毎年 5-6 月には花見客で賑わう。



【写真：多気山】

また多気山に残る城跡、多気城跡がある。多気城は多気山全体を城郭とした関東地方を代表する大規模な山城であり、宇都宮城を本城とする宇都宮氏の出城で、領地の西側を守る重要拠点に位置している。

戦国時代末期、宇都宮氏は南に台頭する北条氏や北の日光山僧兵の侵略に晒されていた。宇都宮城は平城で防御に不向きだった為、宇都宮国綱は多気城を改修して拠点とした。宇都宮仕置で領土が安堵され、再び宇都宮城に本拠を戻していて、慶長 2 年（1597 年）に宇都宮氏が豊臣秀吉によって改易されると同時に廃城となった。現在、土塁や空堀は現存しているが、樹木が生い茂っており、簡単には確認できない。写真(多気不動尊参道から)多気山は木々が生え茂り、斜面もなだらかではなく防御に向いた山城の建設に適していることが分かる。また、宇都宮西部地区が城山地区と呼ばれるのは、かつての山城の多気城の存在に由来する。

《多気山不動尊》

多気山の中腹に位置し、弘仁 13 年(822 年)、尊鎮法師により創建された。当初は馬頭観音を御本尊としていたが、1335 年宇都宮 9 代城主藤原公綱により今の本尊不動明王が御本尊として氏家の勝山城から遷座された。これを記念して 9 月に宵祭り万灯会が開かれる。また、5 月の大火渡り祭ではご修行として火渡りを行うことができ、地域の方の信仰のよりどころとなっている。写真は本堂と本堂に続く階段。鳥居はないが、伏見稲荷大社の稲荷山との雰囲気似ている。



【写真(上/右)：多気山不動尊】



11. 旅行記

1 日目足尾 文責：野口 琉也

足尾班はまず最初に浅草駅で特急りょうもう3号に乗って相老駅に向かった。特急りょうもう3号は日光班の乗ったスペーシアXとは違い、レトロな雰囲気をもつ古典的な列車だった。

相老駅に着くと次に乗るわたらせ渓谷鉄道が来るまでに少し時間があつたので昼食にはまだ早い、駅の周りのコンビニに行ってあらかじめ昼食を買っておくことにした。というのも、事前に調べたところによるとどうやら足尾銅山周辺には昼食を食べるお店がほとんどないらしいのだ。そして駅周辺のコンビニを目指してマップを調べたのだが、



【写真(左/右)：特急りょうもう3号と車内の様子】



【写真(左/右)：相老駅とその周辺】

なんと近くに全然コンビニがないのである。遠くまで歩けばあったが、わたらせ溪谷鉄道が来るまでにさほど時間がなかったので諦めることにした。

その後、わたらせ溪谷鉄道に乗り換えて足尾銅山のある通洞駅に向かった。わたらせ溪谷鉄道は渡良瀬川に沿って線路が引かれており、山の中を走り抜ける。そのため、山の景色を楽しむことができた。この日は天気がよかったので山や川がよく映えた。しかし、山を通るということにはデメリットもある。それは、山道に線路が引かれているために電車がとても揺れるということだ。僕はあまり乗り物酔いはしない体質なので問題なかったが、他の部員が少し酔ってしまったようだったので、わたらせ溪谷鉄道に乗る際は酔い止め薬を持っていくとよいだろう。



【写真：左はわたらせ溪谷鉄道の車両／右は車内から見える景色】

わたらせ溪谷鉄道で相老駅から1時間ほどで通洞駅に到着した。通洞駅から少し歩いて足尾銅山に向かった。トロッキに乗って銅山内へ入って行き見学していった。



【写真：銅山内へ向かうトロッコ】

た状態で土で汚れた弁当箱で食事をする様子は銅山での仕事の過酷さを表している。

足尾銅山見学が想定より早く終わったので予定していたバスが来るまで、昼食も兼ねて足尾市を散策することにした。まずはお腹がすいていたので、お昼ご飯を食べることにした。相老駅で何も買えなかったので仕方なく足尾市にある数少ないお店を探し出し、昼食を終えた。その後、散策をして行ったのが足尾銅山以外何も無いことに驚いた。街を歩く人もほとんどおらず、活気がないのだ。また、たまにすれ違う住民は必ずといっていいほど全員が高齢者で足尾市の過疎化と高齢化の進行具合を目の当たりにした。

散策が終わるとバスに乗ってホテルに向かい、合宿一日目が終了した。



【写真(左/右)：足尾銅山周辺】

銅山内は水がしみだしており、屋根があるのに雨が降ってくるという不思議な感覚に見舞われた。また、一部では硫酸銅がしみだしている部分もあり、その部分の壁は青色になっていた。ところどころに当時の様子を再現した人形があるのだが、中でも特に印象に残っているのは坑夫(銅山の労働者)が銅山内で休憩や食事をしていただということである。下の写真のようにヘルメットを装着し



【写真：休憩する鉱夫】

2日目餃子食べ比べ 文責：野口 琉也

大谷石資料館を見学した後にバスに乗り、宇都宮駅へ向かった。宇都宮駅周辺は人通りが多いということもあり、至る所に餃子屋が並んでいた。その中で僕たちが最初に行ったのはスタミナ健太宇都宮餃子館というところである。この店は駅を出てすぐの大通り沿いにあるため、非常にアクセスが良い。ここの餃子は一つ一つが比較的小ぶりで、肉汁がたっぷりでおいしかった。ちなみに注文はすべてスマートフォンで行うので、食べ行く際はご注意ください。

ちょうどお昼近くだったので結構お腹がすいていたが、他のお店と食べ比べができるようにあまり食べすぎず餃子6個を味わうとすぐに店を出た。

次に行ったのは先ほどと同じ通り沿いにある大谷餃子店というところである。ここの餃子は中の具が多く詰まっ

ていておいしかった。中の具は野菜が多く詰まっていた。宇都宮餃子といえば具に野菜が多く使われているというイメージがあるが、この店の餃子はまさにそのイメージ通りの餃子だった。他の部員が揚げ餃子を頼んでいたので一つもらったが、揚げ餃子もやはり具がパンパンに詰まっていたおいしかった。

餃子の食べ比べをすると決めたときは二件目くらいでお腹一杯になってしまうのではないかと危惧していたが、実際食べてみると案外余裕で食べられてしまう。これは宇都宮餃子がおいしいからなのでは。。？

時間的にも次に行く店で最後の店になりそうだったので三件目は僕が事前に調べて行きたいと思っていためんめんという店に行くことにした。ここは羽根つき餃子が有名なお店で先ほどまでいた大通りから徒歩15分ほどのところにある。店について餃子を注文し、どんな餃子が来るのかと楽しみにしていると、なんと思っていた以上に羽根つき餃子が来たのである。下の写真を見てほしい。羽根がフライパンの形をしているのではないか。僕は今までにこれほど羽根のついた餃子を食べたことがなかったのでテンションが上がった。言うまでもなく味はおいしかった。個人的に羽根つき餃子が好きなの



【写真(上/下)：スタミナ健太宇都宮餃子館】



【写真(左/右) : 大谷餃子店】



でめんめんが一番おいしく感じた。(あくまでも個人の意見です。)

めんめんの近くに宇都宮城址公園があったため、ここにも寄ってみることにした。宇都宮城址公園には宇都宮城の城壁や水堀が残っていた。中央部は公園になっていてその周縁部には、しだれ桜が綺麗に咲いていた。そんな宇都宮城址公園で食休みをして宇都宮駅に戻り、合宿2日目の活動を終えた。



【写真(左/右) : 足尾銅山周辺】



【写真(左/右) : 宇都宮城址公園】

2日目宇都宮 文責：塚崎 瑛登

2日目の宇都宮は大谷資料館に行き、一旦そこで解散して、そこからは何人かのグループで行動した。16時に宇都宮駅に集合し、帰りは新幹線で帰った。まず、僕たちは8時半頃にホテルをチェックアウトして、日光駅に向かった。そこからJR日光線に乗り、宇都宮に向かった。宇都宮駅からバスに乗り、30分ほどで大谷資料館に着いた。大谷資



【写真：多気山不動尊への入口】

料館で1時間ほど見学し、その後、歩いて多気山という山に登った。頂上までは行かなかったが、中腹にある多気山不動尊まで行った。多気山不動尊は822年に創建され、本尊の不動明王像は源頼光が949年に円覚上人に制作を依頼して作られた。12時12分に出発するバスに乗るために急いで山を駆け降りた。

そこから僕たちはバスに乗り、昼食を食べに行った。宇都宮に来たということもあり、餃子を食べた。餃子の店を二軒回り、昼食を終えた。二軒目の店の餃子のメニュー表には緑色をした餃子があった。この緑色の餃子は「にらっこ餃子」と呼ばれており、皮に栃木県産のニラを練り込んでいるという。僕は食べ

なかったが、お土産用の餃子売っているお店で売られていたので買うことにした。

昼食後、今度は宇都宮中央公園内にある栃木県立博物館という施設に行った。ここでは栃木県に関することはもちろん、中3で習った生物の進化や栃木県のバイオームに関する展示もあった。また、地学や歴史に関する展示もありました。さらに今回は行かなかったが美術・工芸・民族・考古に関する展示もあったそうです。ここのマスコットキャラクターは『みーたん』。『みーたん』は後藤遺跡（栃木市）で出土した土偶がモデルで、博物館に舞い降りた縄文時代の女神だそうです。



【写真：宇都宮餃子『にらっこ餃子』】



【写真：栃木県立博物館の入り口】

《日光のバイオーム》

日光の山々は主に山地帯、亜高山帯、高山帯に分けられます。山地帯では落葉広葉樹林が広く見られ、亜高山帯では、常緑針葉樹林とダケカ

ンバ林が見られ、白根山の山頂部が位置する高山帯では、森林限界を超えているため、高山草原や荒原が広がります。

《中禅寺湖の成り立ちと環境》

栃木県を代表する湖、中禅寺湖は、標高 1269m にある湖で、男体山の噴火でできました。最大深度は 163m となっています。

実は、中禅寺湖にはもともと魚がいない湖でした。今いる魚はすべて明治時代以降に放されて定着したものです。

《奥日光の環境の変化》

奥日光ではニホンジカの数が増え、木や草が多く食べられたため、高山植物があまり見られなくなりました。そのため、高山植物を電気柵で囲ってシカから守るといった対策がとられています。

《下野国と東山道》

今の栃木県はかつて下野国と呼ばれ、国府は栃木市におかれていた。古代の日本は、一部地域を除き、「畿内」と七つの「道」に分けられていた。下野国は東山道に属していました。東山道は行政区画のひとつであると同時に京都と東北地方を結ぶ道路のことでありました。

以上は博物館で調べた内容です。15 時頃、僕たちは博物館を後にし、宇都宮駅に向かいました。そこで班員の一人が「宇都宮ライトラインを見てみたい」と言ったので、班員全員でライトラインを見に行くことにしました。なのでそのとき撮った写真も載せておきます。この時点で、16 時の集合まで時間が余ったので、お土産を買うことにしました。買ったお土産から栃木県らしいものをいくつか紹介します。

《栃木県のお土産 2 選》

① 餃子（宇都宮餃子）

宇都宮餃子は言わずと知れた宇都宮の名物料理です。また、宇都宮市の餃子消費量ランキングは浜松市、宮崎市に続き、全国 3 位とついで



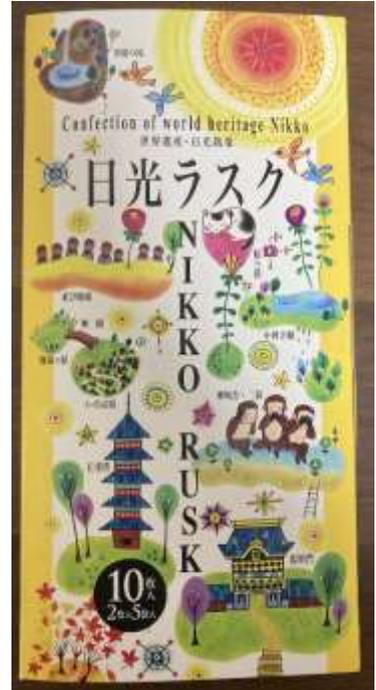
【写真：2023 年 8 月に開業した
宇都宮ライトライン】

ます。僕は、宇都宮発祥の『にらっこ餃子』をお土産として買いました。とはいえ、餃子は賞味期限があまりにも短いので、お土産に適していないと考える人もいるでしょう。しかし、宇都宮駅構内では、長持ちする冷凍餃子も売られており、持ち帰りの時間に応じて保冷剤も付けられるところもあるので、現地で食べるのが一番おいしいですが、自宅でも美味しい餃子を食べることは可能です。

②日光ラスク

今度は日光エリアから、日光ラスクです。僕も何度か日光に行ったことがあります、前回もお土産で買ったような気がします。右の写真からも分かるように日光の名所がいくつも書かれていて、日光のお土産だと一目で分かります。また、この日光ラスクは砂糖の効果でかなり甘くなっています。

時に再度宇都宮駅に集合し、新幹線ホームに向かった。16:20に宇都宮駅に到着した。東北新幹線「なすの号」に乗り、1時間足らずで、東京駅に着いた。



【写真：日光ラスク】

<参考資料>

懐色探訪 みどり市産業観光部観光課

日光二荒山神社ホームページ <http://www.futarasan.jp/>

栃木県立博物館 HP <http://www.muse.pref.tochigi.lg.jp/index.shtml>

<https://www.shimotsuke.co.jp>

<https://www.rinnoji.or.jp/history/>

<https://www.tobu.co.jp/odekake/area/nikko-kinugawa/nikko-kinugawa005.html>

<http://www.oya909.co.jp/>

<https://tagesan.com/>

<https://www.city.utsunomiya.lg.jp/kurashi/machi/>

<https://www.gyozakai.com>

<https://www.museum.or.jp>

mimatsu-grp.co.jp

第三章

「軍都」横須賀の考察 (2023年12月15日)



1. 横須賀の地形

文責：森 遼太

横須賀市は三浦半島の中部、北部を占めており、東は東京湾、西は相模湾に接している。その地形は、「横浜市南部から連続する丘陵地」「観音崎周辺と武山南部に分布する台地」「沖積低地や海岸沿いの低地」の3つに区分することができる。東京湾の入り口は房総半島と横須賀が位置する三浦半島によって形成される。そのため横須賀は現在まで港として利用されてきた。しかし、房総半島沿いと横須賀の港の分布を見ると横須賀や三浦半島沿いの方が多い。これには東京湾の入り口の海底の地形が大きく関係している。東京湾入り口の海底の地形は三浦半島側が海が深く房総半島側が浅くなっているのである。このため、大型船の出入りが多い東京湾では座礁事故などをなるべく減らすためより深い三浦半島側に港が多くなっている。横須賀港内には吾妻島がある。この吾妻島は人工島で元々は小さな半島の一部だった。しかし戦時中、海軍によって作られた水路により半島の分裂部分が今の吾妻島になった。この吾妻島では野口英世などにより黄熱病の研究が行われていた場所でもある。また東京湾唯一の自然島(無人島)である猿島がある。猿島は戦時中に東京湾内の敵の侵入を防ぐための防衛場所として機能していた。そのため戦時中に使われていた爆薬倉庫の跡や砲台の跡が今でも残っている。



【写真：横須賀港の様子】



【写真：猿島の岸壁の様子】

2. 横須賀港の歴史

文責：田畑 裕理

横須賀港の起源となっているのが、1865年に徳川幕府の小栗上野忠順とフランス人技師ヴェルニーが現在の横須賀港がある横須賀村に製鉄所を作ったのが始まりとされている。そのため、現在でも横須賀港の近くにはヴェルニー記念館という当時のヴェルニーの家を再現したものがあつたりもする。その19年後の1884年に横須賀鎮守府ができて以来、横須賀港は軍艦などを作る「軍港」として名を馳せて行った。また、1865年に

できた製鉄所も軍艦を作る造船所として様変わりした。ここで主に造られた船には、軍艦・清輝や巡洋艦・武蔵などがある。

しかし、そんな軍港横須賀に転機が訪れたのが1945年の終戦である。終戦以降それまでの軍艦を造船する役割は終わりを迎え「平和産業港湾都市」として新たな道を進むこととなる。「平和産業港湾都市」となった横須賀は1948



【写真：横須賀港付近にあるヴェルニー公園の様子】

年に正式に「貿易港」として認められることとなった。また、元々の造船所を米軍が活用したことにより今の米軍基地ができる流れとなった。つまり、横須賀港は製鉄や造船といった産業で栄えた一方で、その技術を活かし現在も米軍基地や自衛隊基地などができるようになったのである。

3. 横須賀と米軍の関係

文責：安藤 隼太郎

横須賀は太平洋に面しており、東京の海の玄関口になっている。このため、日本帝国時代には国内最大の海軍基地が横須賀に置かれた。1865年に江戸幕府により設立された横須賀製鉄所を基に、1871年にとして設立され、1903年以降は大日本帝国海軍により横須賀海軍工廠として利用されてきたが、戦後にこれらは全てが米軍に接收され、のちにその一部が自衛隊との共有基地となりつつも、横須賀市は今もなお在日アメリカ海軍の米軍基地を抱えている。また、部外者はアメリカ海軍から入場許可を受けた者しか基地内に入ることは出来ない。年に数回解放日があるが、こちらもパスポートを必要とする。

《基地の概要、機能》

中華人民共和国や北朝鮮、ロシア、イランなどのアメリカ海軍の仮想敵国をはじめとするアジア諸国や、太平洋及びオセアニア諸国への前方展開拠点および修理・補給基地と位置づけられ、在日米海軍司令部や極東海軍施設部隊が置かれている。

《横須賀と米軍の関係》

ブッシュ政権での「米軍再編」政策以降、横須賀に配備されている空母キティホークの後継艦を原子力空母とするなど横須賀基地は着々と強化されているが、具体的な返

還日程は全く不明確であるにもかかわらず、一般市民が「地元の基地が強化されている」との認識を共有していないことは問題になっている。



【写真：空母ロナルド・レーガン】

その中、地元の強い反対の声を押し切って、2008年9月25日には横須賀への原子力空母ジョージ・ワシントン配備が強行されたが、結局これを阻止することはできなかった。その中、入港後もジョージ・ワシントンをめぐる新たな問題が起こっている。横須賀にこれを配備するに際し、米海軍は、原子炉に関わる修理等の作業については横須賀では一切行なわない、

と合意文書で言明していた。ところが、2009年1月5日から5月はじめにかけての4ヶ月にもわたって行なわれた修理作業では、原子炉の一次冷却系にかかわる作業が行なわれたばかりか、低レベル放射性廃棄物を艦体から搬出する作業までが横須賀港内で行なわれた。日米合意外交文書はジョージ・ワシントン入港後たった3ヶ月で反故にされたことになったが日本政府も市も抗議することもしなかった。このような原子力空母問題が浮き彫りになっていることや、海水および周辺土壌に対する重金属等の汚染や近隣住民の人命を脅かされるような事故、ヘリコプターの騒音被害など横須賀市と米軍の間では数多くの問題を今も抱えている。

4. 横須賀の製鉄と造船の歴史

文責：榎本 眞鑑

ペリーが来航してから横浜港の開港を強いられたことによって、自分たちで国を守ろうと意識が芽生えたことで軍艦などといった海軍力の増強が必要となった。製鉄業は国防のための造船業の一環として発展した。造船所の技術的な建設はフランス人のヴェルニーの協力のもとに行われ、その際に造船施設を「鉄を加工する施設」から製鉄所と名付けたことが横須賀製鉄所の始まりである。本稿では、ヴェルニー記念と周辺の散策を通して学んだことをまとめている。まず初めに製鉄業の発展に携わった2人の人物を紹介する。



【写真：資料館の展示】

《ヴェルニー》

ヴェルニーはフランス出身の技師である。彼は、理工学や造船の技術を教えるための横須賀製鉄所内にある施設の「饗舎」の首長であった。饗舎は西洋の最先端の技術を学べたため日本の様々な所から優秀な学生が集まった。そして、近代工学のみならず、フランス料理などといった様々な分野の専門家が生まれた。

《小栗上野介》

米国と日本との条約履行のため渡米し、米国や植民地支配された、東南アジアやアフリカを巡って様々な国の海軍施設を巡り、日本の海軍を含めた工業力の発展が急務だと考え、工業施設と人材育成を目指して横須賀製鉄所の建設に尽力した。



【写真：資料館の展示】

《西洋の影響》

横須賀の製鉄／造船業は、西洋の技術とともに発展したこともあり労働環境など西洋のノウハウが導入され今の日本の労働の礎のもととなった。例えば、日曜休日制や労働時間、メートル法、健康診断などが導入された。

《造船所の今》

150年前に建設された造船所は、当時欧米に負けないくらいの技術力を持っており、現在も米軍の基地内で利用されている。また、造船所内の港は写真の左からドック3、ドック2、ドック1となっており、ドック1では建設当時から残っているレンガ造りの建物があるそうだ。



【写真：造船所があった場所】

5. ヴェルニー記念館

文責：遠藤 壮一郎

《横須賀製鉄所とヴェルニー》

ヴェルニー記念館は、横須賀製鉄所（造船所）を建設し日本近代工業化の基礎を作り上げたフランス人、フランソワ・レオンス・ヴェルニーの功績と横須賀製鉄所建設の意義を長く後世に伝えるために建てられたものである。

江戸時代末期、世界に肩を並べるには日本の海軍力・海運力整備と工業力の強化が急務であるという認識が開国直後の幕府の間で強まり、横須賀製鉄所を建設することになった。ヴェルニーはその際、日本に招かれた外国人技術者の一人である。横須賀製鉄所は本格的な設備と運営計画を持った当時最大の製鉄所であり、明治以後、長崎や横浜の造船所は民間に払い下げられたがここは政府直轄となった。

横須賀製鉄所は名前にある「製鉄」をする場所ではなく、造船と修理、機械製造等を行う総合的な工場だった。ヴェルニーが活躍した頃の横須賀は、ヨーロッパから購入した最新の機械類が設置され、技術専門のフランス人が多数住んでいた町だった。世界遺産にも登録されている旧官営富岡製糸場は、横須賀からバステイアンという設計士が出かけて作ったものである。また、日本最初の洋式灯台観音埼灯台・品川灯台・野島崎灯台・城ヶ島灯台も、横須賀製鉄所が設計施工したものである。このように、横須賀製鉄所から日本各地へ近代西洋技術が伝わっていった。

《横須賀製鉄所とスチームハンマー》

スチームハンマーとは、蒸気（スチーム）を動力としてハンマーを持ち上げて落下させ、加熱した金属素材に打撃力を加えて鍛造作業を行う工作機械で、19世紀半ばにイギリス人のナスミスという人が考案した。このようなハンマーの能力は、落下する部分を合計した重量で表される。スチームハンマーが威力を発揮するには、巨大なハンマーを受け止める地下部分の役割も重要であり、ハンマーの地面の下には落下する部分の総重量の20倍から30倍もある重量物を埋めるのが一般的だった。1866年にスチームハンマーが輸入された当時は、造船の技術革新時代だった。帆船もあったが外輪船もあり、また、太平洋を横断した咸臨丸のように船尾にスクリューを持つ船もあった。スチームハンマーはこれらの船の部品を製作した。特に、明治の初めは外輪船を横須賀製鉄所でも



【写真：ヴェルニー記念館】



【写真：スチームハンマー】

製作していたため、外輪を動かすロッドも加工していた。この横須賀製鉄所は、上のおり当初フランスなどの技術が取り入れられ、続いて明治以後ドイツや英国・アメリカの工業技術も移入された先進技術工場だった。

1889年開業した横須賀駅ホームには、英国とアメリカ製等の古いレールが再利用されている。さらに、造船所（後の海軍工廠）の建物には先進的な技術や外国製を含む鋼材が使われた。なお、造船所で使用する大量の水は、大正初期に自然流下方式で53キロメートル遠方の丹沢山中より引かれていた。途中の水道用鉄橋もアメリカ製の鋼鉄が使われており、水量を測るベンチュリー計という機械も英国製だった。

6. 戦艦「三笠」

文責：薛 文森

三国干渉を受け、推進された六六艦隊整備計画の「三笠」は1902年にイギリス竣工、1905年の日本海海戦で連合艦隊の旗艦としてロシアのバルチック艦隊を撃破した。しかし同年9月に、339名の死者を出した佐世保港内での爆沈事件のため沈没し、また、1920年の尼港事件の際には救援に向かったが氷に阻まれ入港できなかった。1922年にワシントン海軍軍縮条約が締結され、廃棄となったが、戦争の勝利に貢献した象徴として永久に残すべきとの声が高まったため、閣議において記念艦とすることが決定された。戦後は手入れされることなく放置され錆まみれとなったが、高度経済成長期の1961年に復元され、イギリスの「ヴィクトリー」及びアメリカの「コンステーション」とともに世界の三大記念艦となっている。

三笠は世界で現存唯一の前弩級戦艦であり、下甲板のうち伏見宮殿下の使用していた士官室以外は事務室などとして使われており非公開、下甲板より下はワシントン海軍軍縮条約に基づき砂礫などで埋められている。また、戦後の荒廃により、本来の状態で残る部分は少なく、砲塔や煙突、マストなどは複製され、甲板の大半も溶接工法で復元されている。甲板はKC鋼構造で、これは当時としては最新鋭であり、約3割の防御力向上となった。

上甲板：前部には最大射程約1万mの、口径30cmの主砲が2門装備されていて、横須賀から横浜市内まで（上野～品川間）10km範囲を射程圏内におさめる。後方にも2門



【写真：長官公室】

配置されている。そのほかに、12cm 副砲が 4 門、8 cm 補助砲が 8 門右左舷配置されている。日本海海戦において東郷平八郎長官が戦闘の指揮をとった最上艦橋から天気のよい日には横浜市を臨むことができる。また、甲板はいずれも木製であり鉄製である周りの装甲や鉄柱と比べ、少し頼りがいが無い印象を受けた（単に汚れていただけ）。上甲板から中甲板に入る扉は 1.7m 位で、また天井も 1.8m であり、かなり低く感じられた。

中甲板：前部は元は 860 名の兵員居住区、揚弾筒や病室であった区画を改造し、講堂となっている。中部には 15.2cm 速射砲が 12 門装備されていて、また装甲で区切られた個別の砲室を持っており、被弾時の被害を軽減していたと考えられる。後部には、艦長室や職務や事務を行い、会議や食事の場所としても使っていた士官室、連合艦隊の作戦会議・バルチック艦隊の降伏文書の調印行われた長官公室、東郷司令長官が執務された長官室が位置し、装飾の家具や赤いじゅうたんで重厚感が感じ取れた。



【写真（左／右）：戦艦三笠の上甲板】

7. よこすか近代遺産ミュージアム

文責：池田 鴻平

よこすか近代遺産ミュージアムとは現在は米軍基地となっている場所にあったティボディエ邸を解体し、当時宿屋街だった場所に再建したものである。またティボディエの師であったヴェルニーは国から横須賀製鉄所（造船所）の建設、船のメンテナンスをするためのドックの建設、横須賀製鉄所（造船所）にある機械を使いこなすため日本人



【写真（左／右）：当時のティボディエ邸の内装の再現】

への教育、を依頼され 1871 年に 1 号ドックを完成させたことや製鉄所内に技術者養成学校の「覺舎（こうしゃ）」を設け、フランス語で授業を行っていたこと、この卒業生である小栗上野介忠順が 2 号ドックを設計フランス人のもと日本人の手で完成させた（この 2 号ドックでは戦艦「三笠」もメンテナンスされた）ことなど横須賀造船所の歴史をよこす近代遺産ミュージアムでは多く学ぶことができる。更にティボディエ邸の当時の家の造りや内装が再現されている所も見ることができる。



【写真：当時のティボディエ邸の屋根の構造】

8. ドブ板通り

文責：榎本 眞鑑



【写真：スカジャンを売る店】

ドブ板通りは横須賀にある全長 300m 程の商店街である。この地はアメリカと日本の文化が融合した独特の雰囲気を持ち、スカジャンの発祥の地でもある。名前の由来は戦前に流れていたドブ川が人や車が通る際に邪魔となったため、海軍工廠（大日本帝国海軍の軍需工場）からドブ板をもらい蓋をしたことが由来。

実際にドブ板通りに行ってみたら、スカジャンの店はもちろん、レコード屋、楽器屋に加え、ネイビーバーガーの店などアメリカの雰囲気が漂う店が多く立ち並んでいた。

中でも印象的だったのは、普段は見慣れないタトゥーの店だ。また、どぶ板通りには横須賀にゆかりのある有名人の手形が埋め込まれてあったり、地域でアメリカな雰囲気を感じさせる施しがあったりして、東京では中々感じる事のない雰囲気を味わえた。右下は高木豊さんの手形(他にも谷繁さんや王さんの手形もあった)。



【写真：タトゥーの店】



【写真：左はアメリカを真似た道路標識／右は高木豊さんの手形】

9. 猿島

文責：新井 友翔

猿島は幕末に幕府により国内初の砲台として整備された。明治時代に入り陸軍→海軍の順に整備され、第二次世界大戦中に首都防衛の要の要塞として機能した。猿島の中には明治時代に建てられた発電所があり、島の電力を担っているそうだ。また島の至る所に切通しがあった。それは、山を切り開くことで樹木や葉に道が隠れることで敵の航空機から見えなくしている工夫だった。途中で急な曲がり角があり奥が見えないところがあった。そこにはポツダム宣言受諾後、猿島に上陸したイギリス兵が奥で日本兵が待ち伏せしていないか警戒し威嚇射撃した跡があり、印象



【写真：猿島の概観】

的だった。その先には、兵舎や弾薬庫があり、中々見る機会はないと思うのでよかった。フランス式とイギリス式の二つの種類の煉瓦積みがあった。日本国内で見るとフランス式で建てられたものは少ないが猿島ではほとんどがフランス式だった。フランス式からイギリス式に変わったのはフランスと密な関係だった幕府からイギリスと密な関係だった新政府に政権が移るといふ政治的な背景があったのかもしれないと思った。旧軍が整備した大砲の跡も見ることができ、高角砲の跡はかなり大きく意外だった。僕たちが猿島に行った時は天候がかなり悪く観光客が少なかった。しかし観光が少なく天候が悪かったことが実際に要塞として機能していた猿島を感じることでよかったと思う。

10. 旅行記

文責：野口 琉也

今回の巡検は高校二年生の先輩方が地理部を引退され、新体制となってから初の巡検だった。そんな巡検で訪れたのは歴史の深い港町、横須賀である。

《戦艦三笠》

まずはじめに戦艦三笠を訪れた。この日はあいにくの雨で気温も低く、とても寒かったが戦艦三笠はそんなことも忘れさせてくれるくらい迫力のある戦艦だった。さすがに日本海海戦で活躍しただけあって大砲が特に立派で、こんな大砲で撃たれたらひとたまりもないと感じた。艦内には、艦長室や講堂などが復元されているものもあれば、日本海海戦をゲーム感



【写真：戦艦「三笠」】

覚で学ぶことができるシミュレーターや VR などもあった。僕はほかの高校一年の部員とともにシミュレーターで遊んだ。シミュレーターにはハンドルがついており、そのハンドルと画面が連動して操作できるようになっていた(簡単に言うと、ゲームセンターにあるマリオカートみたいな感じ)。それが想像以上に楽しく、高校一年の部員全員でのめり込んでしまった。ちなみにこれは小・中学生向けらしい…。これを読んでいるあなたもぜひ一度お試しあれ。

《猿島》

戦艦三笠の見学が終わると次に向かったのは猿島だ。猿島には専用のフェリーに乗って行くことができる。このフェリーは全体が真っ白でラグジュアリーな雰囲気だった。先ほど見学した戦艦三笠とのギャップが大きく時代の差を感じた。まだ朝早かったこともあり、行きの便では地理部員でほぼ貸し切り状態だった。



【写真（左／右）：猿島に行くフェリー】

そんなフェリーに乗って約 10 分ほどで猿島についた。まず最初に案内所で猿島に関する動画を見たり、ガイドさんに解説してもらったりして猿島とはどういう場所なのかということを知った。個人的に驚いたことは猿島は東京湾に浮かぶ唯一の自然島で、湾内最大の無人島であるということだ。

案内所での解説が終わると次はいよいよガイドさんと一緒に実際に猿島を周り、見学していった。猿島は江戸、明治、昭和の時代に要塞島として使われていたため、今でも要塞の跡が残っていた。その中で特に興味深いと思ったものは弾薬庫である。弾薬庫の横には必ず小さな部屋がある。この小さな部屋から弾薬庫を覗いて管理していたらしい。「弾薬庫に直接入って管理すればいいじゃないか！」そう思った方もいるだろう。しかし、昔はライトの代わりに火を使っていたため火を持ったまま弾薬庫に直接入るととても危険である。そのため隣に小さい部屋を作ってそこから弾薬庫を覗いていたらしい。このように実際に使われていた要塞の跡を見学していった。



【写真：猿島の要塞跡】

《昼食》

猿島からフェリーで帰ってきた後は一度解散して昼食を食べに行った。僕は高一年の部員とともに横須賀名物ネイビーバーガーを食べに行った。名物というだけあって横須



【写真：ハニービー
レギュラーネイビーバーガーコンボ】

賀にはハンバーガー屋がたくさんあったが、その中で僕たちが行ったのはハニービーというお店である。ハンバーガー一つがとても大きいため、つぶして食べる必要があった。具材と味付けは非常にシンプルでバンズの間にはレタス、トマト、そして肉が入っていた。肉は塩味でつなぎなどもあまり使っていないようだったので肉肉しくておいしかった。

《ドブ板通り》

昼食を食べ終わり、次に向かったのはドブ板通りである。ここからは班に分かれて行動した。このドブ板通りにもやはりハンバーガー屋が多いと感じた。また洋服屋も多く、特にスカジャン屋が多かった。もともとアメリカ兵向けのお土産としてスカジャンのお店が多くできたとされているが、ドラえもんやアンパンマンなどの刺繍が入ったスカジャンもあったため、今では日本人のお土産にもなっていた。僕たちはこの商店街でお土産を買った。



【写真：ドブ板通り】

《横須賀近代ミュージアム》

ドブ板通りを一通り周ったあとは少し歩いて横須賀近代ミュージアムを見学した。館内に入ると従業員の方々が歓迎してくれ、展示物の解説もしてくれた。中でも横須賀製鉄所が細長く入り組んでいる形をしているのは船を入れるため、そこで船の整備、修理を行っていたということは初めて知ったため面白いと思った。

《ヴェルニー記念館》

横須賀近代ミュージアムからヴェルニー公園を通り、最後に見学をしたのがヴェルニー記念館である。この館内には横須賀製鉄所で使われていたスチームハンマーの模型が



【写真：スチームハンマー模型】



【写真：横須賀製鉄所】

展示されていた。先ほどの横須賀近代遺産ミュージアムでスチームハンマーが横須賀製鉄所で使われていたことは学んだが、どういった原理なのか、実際どのくらいの大きさなのか、などということは知らなかったもので、このヴェルニー記念館で学ぶことができた。

《解散》

ヴェルニー記念館を見学し終わった後は他の班と合流し、JR 横須賀駅にて解散となった。この日は気温が低かったため一日中寒かったが横須賀にはその寒ささえも忘れるほどの魅力があると感じた。

〈参考資料〉

ヴェルニー記念館のパンフレット

<https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2001/00125/contents/00019.htm>

<https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/>

[land_history_2011/mapdata/523964/523964_REF.pdf](https://www.mlit.go.jp/land/history/land_history_2011/mapdata/523964/523964_REF.pdf)

<https://www.kinenkan-mikasa.or.jp/>



第四章

神田リバーサイドを巡る (2024年2月23日)



1. 靖国神社

文責：榎本 眞鑑

靖国神社は明治維新後に国家のために殉難した人を祀る神社である。本稿では靖国神社と境内にある遊就館についてまとめた。

靖国神社は、明治維新後に殉国者の霊を祀るもので、昔は吉田松陰や坂本龍馬らなどが祭神となった。しかし、国のためとは言え府に楯突いた者の霊はまつられていない。靖国神社のその他の特徴は、桜についてだ。境内には、東京管区気象台が指定した東京の桜の標本木があり、古くより桜の名所として知られている。桜の見ごろである3月下旬から4月上旬には「奉納夜桜能」「奉納芸能」など、多くの催しが行われ、多くの参拝者が訪れる。



【写真：左はサクラの標本木／
右は靖国神社の鳥居】

遊就館は、「祭神の遺徳を尊び、古来の武具を展示する施設」という構想のもと、イタリアの建築家によって建設された。関東大震災や戦争を経て、修復や増築を繰り返し、平成14年にガラス張りの新館が建設された。遊就館では、零戦や戦時中の銃器などが展示されていた。その中で最も印象に残ったのは戦場から帰ってきた物の展示についてだ。割れたヘルメットや仲間を弔うメッセージが刻まれているスコップや戦場での気持ちを記したメモなど戦争の怖さを改めて知ることができた。他にも第二次世界大戦前後



【写真：左は新館／右はレンガ造りの旧館】

の日本の動向を展示されているブースなどもあったが時間の都合で見学し切ることはできなかった。今まで詳しく戦争について知る機会がなかったので是非とももう一回行きたいと思った。

2. 湯島天満宮

文責：池田 鴻平

湯島天満宮の表鳥居には湯島天満宮の由緒が記されており、西暦 458 年 1 月に雄略天皇の勅命により、「天之手力雄命（あめのたちからおのみこと）」を奉斎されたのが始まりと書かれている。また、現在のように菅原道真が祀られるようになったのは西暦 1355 年 2 月に湯島郷民が菅原公を文道の大祖と崇め湯島天満宮に歓請してからだと言われている。西暦 1478 年に修建されている。御朱印は 4 種類売られており、普通の御朱印やその月限定の切り絵の御朱印なども売られている。当然、お守りを購入することも可能になっている。境内には屋台が並んでおり、ベビーカステラ、焼きそば、お好み焼きなど他にもたくさんの温かい食べ物が多く並んでいて年始に初詣をしに来た人々に親しまれている。鳥居の正面から見える本殿に向かうと少し手前に左右に一对の狛犬が梅の木と共に据えられているのを見ることができる。また巡検当日は雨が降っていたもののきれいに梅の花が咲いており景観を楽しむこともできる。



【写真：左は獅子／中央は本殿／右は狛犬】

3. 湯島聖堂

文責：森 遼太

湯島聖堂は徳川五代将軍徳川綱吉によって元禄 3 年に儒学の振興を図るために、上野にあった林家の私塾を湯島の地に移したことが始まりである。その後、100 年を経た寛政 9 年に寛政異学の禁によって林家の手を離れ、幕府直轄学校として「昌平坂学問所」が開設された。明治維新により、聖堂・学問所が新政府の管理下におかれ当初、学問所は大学校・大学と改名され残されていた。しかし、明治 4 年にこれを廃止し文部省

が置かれることになり林羅山以来240年、学問所となってから75年の歴史に幕を閉じた。大正11年湯島聖堂は国の史跡に指定された。翌12年の関東大震災により入徳門と水屋を残し焼失してしまったが、斯文会が中心となり、全国に募金を展開した。そして、東京帝国大学（現在の東京大学）博士の伊東忠太の設計と（株）大林組の協力により昭和10年に寛政の姿を模し、鉄筋コンクリート造りでの再建設に成功した。平成5年には文化庁による保存修理工事が再び大林組によって行われ、平成21年に終了している。現在では、湯島天満宮と共に年間を通して合格祈願の参拝のため、多くの受験生が訪れる参拝スポットとして有名になっている。再建設の中心となった斯文会は明治13年東洋の学術文化の振興を意図した岩倉具視が谷干城らと創設した「斯文学会」を母体とし、大正7年に財団法人斯文会となったものである。昭和31年に斯文会は湯島聖堂の管理団体に指定されている。



【写真（左／右）：湯島聖堂】

4. 神田明神

文責：水谷 颯

正式名称を神田神社として、東京の中心である神田、日本橋、秋葉原、大手丸の内、旧神田市場、豊洲魚市場などの108個の町会の氏神様となっている。「明神さま」の名で親しまれている。縁結び、商売繁盛、除災厄除の神様が祀られている。天平2年(730)に出雲氏族の真神田臣（まかんだおみ）により武蔵国豊島郡芝崎村（現在の東京都千代田区大手町・将門塚周辺）に創建された。その後、将門塚周辺で天変地異が頻発し、将門公の御神威として人々を恐れさせたため、時宗の遊行僧・真教上人が手厚く御霊をお慰めして、延慶2年（1309）に奉祀した。戦国時代になると、太田道灌や北条氏綱といった名立たる武将によって手厚く崇敬された。慶長5年（1600）、天下分け目の関ヶ原の戦いが起こると、徳川家康公が合戦に臨む際、戦勝のご祈祷を行った。そして、9月15日、神田祭の日に見事に勝利し天下統一を果たした。これ以降、徳川將軍家より縁起の良い祭礼として神田祭を絶やすことなく執り行うよう命じられた。江戸幕府が開かれると、幕府の尊崇する神社となり、元和2年（1616）に江戸城の表鬼門守護の場所にあたる現



【写真：神田明神】

在の地に遷座し、幕府により社殿が造営された。以後、江戸時代を通じて「江戸総鎮守」として、幕府をはじめ江戸庶民にいたるまで崇敬を受けている。明治時代に入り、社名を神田明神から神田神社に改称し、東京の守護神として「准勅祭社」「東京府社」に定められた。明治7年(1874)には、明治天皇が参拝し御幣物を献じた。

5. ニコライ堂

文責：榎本 眞鑑



【写真：ニコライ堂】

ニコライ堂の名で知られている東京復活大聖堂は1884年から1891年に7年の歳月をかけて建設された正教会の聖堂だ。その後関東大震災で被災するも多くの支援者と共に聖堂を復興させた。日本では有数のビザンチンの建築様式で国の重要文化財に指定されている。本稿では、正教会と聖堂を見学して学んだことをまとめた。

《正教会とは》

正教会とは「正統派の教会」という意味である。また、ロシア正教会やギリシア正教会などあるが正教会はどの場所であっても同じ信仰と教義を共有しており、「ロシア」や「ギリシア」という言葉は民族や地域を指す物である。正教会の特徴は偶像崇拝が禁じられているところである。その代わりに「イコン」というキリストや聖人、聖書の場面などを描いた平面画である。しかし、このイコンも偶像崇拝に当たるのではないかという激しい議論が行われたものの、結局、偶像崇拝に当たらないという結論に至った。

《聖堂の見学を通して》

聖堂内は全ての場所で撮影禁止だったためこの先は文章のみとなる。聖堂内では教会の方から説明を受けた。1917年のロシア革命によって無神論を奉じるソビエト政権が成立

するとロシア国内の聖堂や修道院が閉鎖され、財産が没収された。その影響は国内のみならず日本を含む国外にも影響が及び、ニコライ堂は十分な資金がなく改修することがままならないと説明を受けた。他にもそれぞれの壁画についても説明を受け、その中にはセント・ニコラウスというサンタクロースの由来となる人の説明も受けた。

6. 神保町古書店街

文責：薛 文森

靖国通り上の東西約 500m におよそ 130 店もの古・新書店が建ち並び、中には美術、洋書、料理、など一つのジャンルの本を専門に扱う店もある。世界でも有数の古書店街であり、古本の聖地とも言われる。明治時代に当時の学問の中心地であった神田地区に、多くの書店が集まり、昭和初期には、大学や専門学校が周辺に多く立地し、学生や研究者が多く訪れる場所となり古書店街が形成された。古書店をきっかけに発展していった喫茶店、カレー屋もあり、一説によると、本を片手に持って食べられるという理由で古書店街でカレー屋が流行となった。



【写真：古書店街の通り】

絵本、SF、文学、漫画、哲学、科学など様々な種類の本が陳列されており、お目当ての本が決まっている場合は案外探しにくい。一例としての楽しみ方は、自分の行きつけを決めておいて、大まかに見て歩き、本との一期一会の出会いを楽しむことで、楽しい本の散歩ができる。また、北を向いている古書店が多いのは、店頭に並ぶ本が日焼けするのを防ぐためのだ。

この地で、最初は古本屋として創業した岩波書店のほか、小学館や集英社の大手出版社の本社も在立する。そのほか、魅力的な路地が多く、神保町交差点から延びる 4 本の街道筋、その全てに裏通りがあり、散歩心が高ぶる。

神田古本まつりは昭和 35 年に始まったという歴史あるイベントで、10 月の読書週間の時期に開催される。地区内の古書店には都内の古書の約三分の一が集約していて、総出品数は 100 万冊を超える。新書をメインとした「神保町ブックフェスティバル」、界隈のカレーナンバーワンを投票で決める『神田カレーグランプリ』は後援として、同時期に開催される。また、古書店と向き合うように古本が陳列される様は「本の回廊」と形容される。

7. 神田川に架かる橋

文責：為野 進也

《聖橋》

ニコライ堂がある神田駿河台四丁目と湯島聖堂のある文京区湯島一丁目を結んでいる橋である。全長約 90m のうち、神田川上部の約 36m が放物線を描くアーチ橋で、形式は鉄筋コンクリートアーチ橋。昭和 2 年（1927）に関東大震災の復興橋の一つとして架けられた。また聖橋という名は一般から懸賞募集して付けられたものである。建築された当時の神田川は船が運航されていたため、船から見上げた時に最も美しく見えるように設計されており、2017 年には土木学会選奨土木遺産に認定された。近くに JR 御茶ノ水駅聖橋口が位置しているためか、通行量も多い様子であった。



【写真：聖橋】



【写真：昌平橋】

《昌平橋》

淡路町二丁目から外神田一・二丁目に通じる橋。長さ約 23m、幅約 30m で、橋床形式は鉄筋コンクリート。最初にこの橋が架けられたのは寛永年間（1624～1644）で、昌平橋という名の起こりは元禄 4 年（1691）に将軍徳川綱吉が湯島に聖堂を造営し、孔子の故郷である中国の国昌平郷にちなみ、昌平橋と名乗るように命じたことによると言われている。明治維新後、相生橋と名を改めたが、明治 6 年（1873）に洪水で流されており、その後明治 32 年（1899）に再建され、再び昌平橋と命名された。現在の橋は昭和 3 年（1928）にかけられたものである。また、歩道が車道と分かれて独立しているという珍しい造りで安全性も考慮していると思われる。

《万世橋》

神田須田町一丁目と外神田一丁目を結ぶ橋。最初は明治 17 年（1884）架けられた木橋で「昌平橋」と呼ばれ、その後、「新万世橋」、「万世橋」と名称を替えた。明治 36 年（1903）ほぼ現在の位置に架けられたが、関東大震災



【写真：万世橋】

で被害を受け、昭和5年（1930）に長さ約26m、幅約36mのアーチ橋が完成した。この橋の特徴として、巨大なアールデコ調の橋灯付き親柱が挙げられる。

8. 東京水道歴史館

文責：遠藤 壮一郎

《江戸の水道事情》

江戸時代に江戸市中へ飲料水を供給するために神田上水を作り、次に玉川上水を作った。その後、江戸市中の人口は著しく増加してきたため神田・玉川上水のほかに新たに亀有、青山、三田、千川の四系統の上水が相次いで開設された。しかし享保七年八大將軍吉宗の治世下において突然この四上水が廃止される。廃止理由は、不明である。四上水の廃止により堀井戸の技術も進んだが、亀有上水を利用していた地区では良質の堀井戸に恵まれなかった。そこでこの地区に生活する人のために神田・玉川上水の余水を舟で運送し、本所、深川へ販売する水舟業者が現れた。水舟業者による給水は明治維新後も続き、近代水道が引かれるまで続けられた。

玉川上水は羽村から四谷大木戸まで水路を掘り、四谷大木戸からは地中に埋められた樋により配水された。江戸時代に使われた木製の水道管のことを木樋という。木樋の蓋は溝からの水が木樋に流れ込まないように一枚板が使用されている。また、柵に向かう木樋においては、水の流れる方向に垂直になるように樋の蓋の木目が揃えられている。木樋の結合部分には組み合わせる樋がわかるように絵印の刻みが入っている。

現在の水道設備のように配水管、給水管の役割を果たすために様々な大きさや形の木樋が継手により連結され上水井戸へ給水された。上水井戸は共同で使用され、各家では上水井戸から水を汲み、水瓶か水桶にためて、生活に利用した。また、水の流れや汚れ具合を確認するために所々に水見柵を設け、その蓋をとって確認できる構造になっていた。常に安全な水を供給するためには、単に上水設備を整備するだけでなく、その保守、管理が重要であった。これらには莫大な費用がかかるため費用を賄うものとして、上水の利用者から徴収したものに普請金や水料があり、その他に受益者から取り立てたものに茅年貢があった。

その後、明治維新後わずか四年の間に江戸上水の所管が8回余り交換された。江戸時代以来の木樋による上水は、水路付近の市街化や、木樋の腐朽、下水の混入のため汚染が激しく、伝染病の危機にさらされていた。

明治19年のコレラの流行は近代水道の促進の大きなきっかけになった。横浜で発生したコレラは東京府当局の防疫をすり抜けて東京各地で患者が発生していった。こうした出来事は、江戸時代から変わらない水道の現状に対する批判となり、水道改良事業の実施を要請する市民の強い声となった。

《近代水道の仕組み》

近代水道は玉川上水路を利用して多摩川の水を淀橋浄水場へ導いて沈殿、濾過を行い、有圧鉄管により市内に供給するもので、明治31年に神田・日本橋方面に通水したのを始めとして、順次区域を拡大し、明治44年に全面的に完成した。初期の淀橋浄水場には、沈殿池で原水の塵芥を沈殿させ、ろ過地でこの水をろ過し、浄水池にためるという工程で飲料水が作られた。蒸気ポンプにより加圧して高地給水地域に配水し、低地給水地区には芝、本郷給水所に自然流化で送水し、各給水所に設けた配水池から配水した。近代水道完成から2年後の大正2年には村山貯水池、塚浄水場の建設を中心とする第一水道拡張事業が開始された。関東大震災の後、都市化の波は東京市の近郊におよび、昭和7年、町営・町村組合経営の十水道は市営に統合された。市域拡張に伴って増大する水需要に対応するため、小河内貯水池、東村山浄水場の建設を中心とする第二水道拡張事業が昭和13年に着工された。戦後は、焼け跡の漏水修繕等復旧作業に全力を行い、戦争により中断していた第二水道拡張事業等を再開し、また、相模川系拡張事業当の事業を開始した。昭和30年代、戦後の復興期から高度経済成長期に入ると、東京は急激な発展を示して、水道需給はさらにひっ迫してきた。このため、ようやく利根川を水源とする新たな拡張事業が開始した。四次にわたる拡張事業によって、金町、東村山の各浄水場の拡張や朝霞、小作、三園、三郷の各浄水場の建設が行われたほかに、送・配水幹線網も整備された。浄水場から配水できる1日当たりの水量が17万 m^3 だったが、現在では1日当たり686万 m^3 の施設能力を有する、世界有数の規模の水道に発展した。



【写真：左は東京都水道歴史館の概観／右は江戸時代の水道管 木樋】

9. 旅行記

文責：安藤 隼太郎

今回の巡検は、神田、御茶ノ水、飯田橋エリアを散策し、神田川沿いの地域の交通の要塞となる 橋や、宗教施設、神保町の本屋街などの多彩な都市景観の観察をするべく、

2月23日の天皇誕生日の朝9時に御茶ノ水駅集合という形で始まった。いつも通り神田川右岸(北側)班と、神田川左岸(南側)班の2班に分かれ、私は南側班で行動した。こちらでは、その南側班の活動を私の視点から報告しようと思う。※基本的に為野君と新井君と一緒に行動しています。最初に、聖橋の写真を撮ったあと、徒歩で小川町駅に向かい、そこから半蔵門線で九段下駅に移動した。この日は雪の予報が出ており、雪の場合は延期、冷たい雨なら決行という前提で行われたほどで、あいにくの悪天であったが(冷たい雨の方に転んだので巡検はギリギリ決行できた)、新御茶ノ水駅と小川町駅直結の地下通路を通ることで雨風を凌ぐことが出来た。そもそも街中に当たり前のように地下通路が存在することに私は感心していた。その後、靖国神社に向かい1時間自由見学となった。ここは1879年から続く、国家のために殉難した軍人の英霊24万6000坪を祀っている神社である。参拝したのち、境内の遊就館という軍事史博物館を巡ることにした。一階のホールには艦上爆撃機「彗星」、人間魚雷「回天」、「九七式中戦車」などの大型兵器や、アジア・太平洋の戦地にて戦後収集された多くの戦跡収集品を展示されていた。年末に見たゴジラ-1.0にこんな感じのが出てきたなあと思いつつ、奥に進むと1階、2階の展示室は明治維新～大東亜戦争の展示がされていた。撮影禁止のところが多いため、写真を貼ることは出来ないが、ここも貴重な慰留品や御神宝などのボリュームミーな展示で、最初は拝観量が結構高いなと感じていたが、良心的な価格だと考えを改めた。



【写真：零式艦上戦闘機五二型（ゼロ戦）】

その後、徒歩で昭和館に向かった。ここは国民が経験した戦中、戦後の労苦を後世に伝えるべくして設立された国立の博物館で、写真展示に加え、膨大な数の映像、音響資料が展示されていた。戦時中の国際情勢を軍事の観点から捉えたものから、戦後の国民のエンタメまで幅広いジャンルの映像資料が残されていた。私は野球観戦が好きなので、戦前のプロ野球の映像などを漁った。

昭和館を出たあと、北の丸公園、竹橋を歩いて神保町古書店街に行き、そこで昼解散となった。やはり神保町は古書店や飲食店がとても多く、数百メートルしか離れていないものの、閑散としていた九段下駅周辺に比べてかなり景観の違いを感じた。ここで、私は部員2人と「書泉グランデ」という大型の書店に入ってみることにした。スポーツ、ミリタリー、コミック、ノベル、ヒストリア、精神世界、数学、アウトドア、等多くのスペースがあり、どのジャンルもかなりマニアックなものまで扱っていた。まさに



【写真：ニコライ堂】

趣味人専用書店のような感じで、ロコミを見ても、趣味人からの根強い人気うかがえた。昼は家系ラーメンを食べようという話になったが、お目当ての店が閉まっていたので、代替案を考えた末、某中華チェーン店で昼食を取ることにした。神保町は飲食店のバラエティも豊富なだけにチェーン店はあまり良い選択とは言えない。惰性である。その後、お茶の水で集合し、ニコライ堂に向かった。ここは正式名称を東京復活大聖堂と言い、1891年から続く正教会の大聖堂である。正教会は偶像崇拜が禁止されており、イコンと呼ばれるキリストや聖人のなどの描かれた平面画に向かって祈りを捧げること、讃美歌は聖歌と呼ばれること、原則お祈りは立ってすることなど多くの説明をしてもらい、勉強になった。私自身過去キリスト教の幼稚園に通っていたが、そこはプロテスタントであったためかなり違いも感じ新鮮であった。

その後は、神田川沿いを歩き、昌平橋、万世橋を見たあと秋葉原駅から中央線に乗り飯田橋駅に行った。秋葉原はこの日に訪れたエリアでも最も賑やかで、外国人観光客も多くみられた。ここ近年アニメや漫画はもはや日本文化の代表と言っても過言ではない程海外でも人気なので、納得である。その後、中央線で、最後の見学スポットである東京大神宮へ向かうべく飯田橋駅まで移動した。飯田橋駅は池袋駅まで有楽町線で9分、新宿駅まで12分、渋谷駅まで21分、東京駅まで8分で行けるのだが、これは日本一アクセスが良い駅なのではないかと私は思っている。東京大神宮は、天照大神、豊受大神を主祭神とする神社であり、悪天ながらも多くの人が参拝していた。最高気温5度のこの日に朝からフィールドワークをしている私たちは寒さが限界になったのか参拝を早急に済ませ、近くのファミリーマートのイトインでコーヒーを飲み、暖をとった。

新井君はコーヒーが嫌いらしく、そもそもコーヒーは美味しい飲み物なのかどうかについて3人で議論をしていたら(私はキリンファイア 冴え渡るキリマンが好き)、時間を迎えたので飯田橋駅へと南側班に戻り、北側班が戻ってくるのを待つという形になった。実は南側班は予定より30分以上早く到着してしまったためここでも再びモスバーガーで温かい飲み物を飲み、暖をとった。やはり夏の冷たい飲み物と冬の暖



【写真：東京大神宮】

かい飲み物は人々の QOL を大幅に上げていると思う。

そして、北側班が合流したあと地理部恒例の、部長の「巡検は帰るまでが巡検です。気をつけて 帰りましょう。」という締め挨拶で解散となった。とにかく寒かったという感想が最初に出てくるほど寒かったが、実際に神田川沿いの地域の景観の違いや街の特徴を自分の目で見る事が出来たので、良い 1 日となった。ちょうど 3 週間後くらいにも春合宿も控えているので、今後も引き続き活動に精進したいと思う。

〈参考資料〉

千代田区観光協会ホームページ <https://visit-chiyoda.tokyo/>

湯島聖堂ホームページ <http://www.seido.or.jp/>

神田明神ホームページ <https://www.kandamyoujin.or.jp/>

<https://b-kanko.jp/spot/211>

<https://tabichannel.com/article/1184/yushimaseido>

<https://visit-chiyoda.tokyo/app/spot/detail/50>

<https://jimbou.info/>

<https://san-tatsu.jp/towns/77266/>

<https://www.waterworks.metro.tokyo.lg.jp/suidojigyo/gaiyou/rekishi.html>

<https://www.suidorekishi.jp/collection/>

<https://www.city.chuo.lg.jp/a0052/bunkakankou/rekishi/bunkazai/kuminbunkazai/>

<umemasuoyobimokuhi.html>

<https://www.waterworks.metro.tokyo.lg.jp>

第五章

川越の考察 (2024年6月9日)



1. 川越の概要～商都川越 城下町川越～

文責：橋本 弓彦

川越は近世以降、江戸時代に川越城の城下町として栄え、「蔵造りの町」や「小江戸」として知られている都市である。「蔵造りの町」や「小江戸」として呼ばれる所以は、明治時代に発生した川越大火であり、江戸時代に建てられた「蔵造りの建物（格子窓かつ瓦屋根かつ土壁に漆喰）」が火事に耐え抜き、それをきっかけに耐火性のある同じような建物が多く建てられたことされる。

蔵造りの町並みとして発展し、時の鐘や菓子屋横丁も存在する仲町から札の辻の区間とその周辺は店が多く建ち並び、国内外の観光客も多く見受けられ非常に活気がある。そのような商店街は前述の通り「蔵造り」の建物も多いが、レンガや観音開きの窓で構成された「蔵造りではない」建物も多数。個人的な主観だが、後者の占める割合の方が多いと感じた。中には某喫茶チェーン店も景観を守るため、後者のような建物の作りとなっていた。



【写真：蔵造りを意識した某喫茶チェーン店】

川越はここまで述べた商都としての一面だけではない。川越は川越城の城下町として栄えた歴史もある。川越城は現在、本丸御殿の大広間と玄関のみ残っている。川越城の一部だけが現存しているが、近接する川越市立博物館で展示されている江戸時代の川越の模型などの資料を見れば、いかに広大であったか想像する事は容易である。また、日本の城跡で本丸御殿が残っている城は川越城と高知城の二つであり、非常に貴重である。

川越には城跡だけではなく多数の寺社仏閣も存在する。今回の巡検で訪問した川越氷川神社は、川越城の城下の守護神として崇敬されたり、川越氷川祭という伝統行事が人気であったり、川越において主要な神社であるという印象を受けた。また、縁結びの神社としても知られており、訪問時には結婚式が行われていた。



【写真：左は川越城本丸御殿／右は川越氷川神社】

2. 城下町川越

川越城 文責：塚崎 瑛登

川越城は 1457 年に太田道灌によって築かれたとされている。川越城には現存のまま残されている本丸御殿がある。また、本丸御殿が残されている城は東日本では1つ、全国でも2つしかない。



【写真：川越城本丸御殿】

川越城は、2006年に「日本100名城」の一つに選ばれている。川越は川越城の城下町で小江戸と呼ばれている。

川越氷川神社 文責：為野 進也

埼玉県川越市宮下町に位置する神社。約千五百年前、古墳時代の欽明天皇二年に創建されたと伝えられており、その後室町時代川越城が築城されて以降、城下の守護神として歴代城主により崇敬されてきた。

現在では国の重要無形民俗文化財に指定されている川越氷川祭や、昔からの言い伝えにちなんだ縁結びの神社としても知られている。

鳥居は東側の大鳥居と南側の大量の風鈴が下げられている鳥居の2基があり、大鳥居では縁結びの言い伝えがあっか、神前結婚式が開かれていた。境内は非常に多くの観光客で賑わっており、国外から来た人も見受けられた。所々説明が外国語で書かれているところがあり、そういったことも意識していると思われる。また、おみくじは通常のものやこどもみくじの他に、氷川神社ならではの「むすびの歌占」という万葉集の中から選ばれた和歌が入っているおみくじや期間限定の「鯛みくじ」などがある。以上のことから、川越氷川神社はその独自性を生かした場所であると感じた。



【写真：左は南側の鳥居／右は東側の鳥居】

菓子屋横丁 文責：薛 文森

色とりどりのガラスが散りばめられた石畳の道に、約 20 軒程度の菓子屋などがひしめく川越の北西の観光スポット。約 20 軒が工夫を凝らした駄菓子類などを製造・販売しており、1つの店だけで 50 種類以上の商品を取り扱っている。



【写真：菓子屋横丁】

元々この横丁は養寿院の墓参道路であり、明治のはじめに菓子職人である鈴木藤左衛門が松本屋という店を開いた。その後、弟子たちがのれん分けをして、菓子屋横丁が建設された。最盛期の昭和の初期では 70 軒ほどの業者が軒を連ねていて、関東大震災で被害を受けた東京に代わって駄菓子を製造供給するようになった。昭和 20 年代には第二次世界大戦の影響により激減し、昭和 40 年代からメーカーによる大量生産や洋菓子の流行により衰退していった。昭和 58 年に官民一体となった町並み保存活動が起こり、その後「菓子屋横丁会」が結成され、それまでの製造・卸売から小売へと業態を変化させた。時代の移り変わりとともに、現在の店舗は 20 数軒のみだが、近年になって昔の駄菓子を懐かしむ観光客が増え、川越の名所となっている。

駅から最も遠い名所の一つであるのだけれども駅前の通りと同じ位人で賑わっていて活気にあふれていた。店頭には並んでいるものは和菓子が最も多いが、ほかにお土産としての箱入り洋菓子やお面、野菜や果物（冷やしきゅうりやイチゴあめのような類）もあった。和菓子はいずれも 100～400 円程度の値段で、実演販売している店もあり、あめの専門店も見かけた。また、昼頃であり路地裏の飲食店も賑わっていた。

環境としては石畳の道であり、また蔵造りではないけれど、店舗は和風の民家が多く、素朴で昔懐かしい味を今に伝える菓子作りの店が立ち並び、一歩足を踏み入れると、誰もが子供に返ったような気分になれる場所であり、人情味あふれる横丁の情緒や威勢の

元々この横丁は養寿院の墓参道路であり、明治のはじめに菓子職人である鈴木藤左衛門が松本屋という店を開いた。その後、弟子たちがのれん分けをして、菓子屋横丁が建設された。最盛期の昭和の初期では 70 軒ほどの業者が軒を連ねていて、関東大震災で被害を受けた東京に代わって駄菓子を製造供給するようになった。昭和 20 年代には第二次世界大戦の影響により激減し、昭和 40 年代からメーカーによる大量



【写真：名物の黒砂糖ふ菓子を売る店】

良い呼び込みの声、素朴で懐かしく温かい街角は、時代が変わっても人々に安らぎを与えてくれる。

前のページの写真は、川越の名物の一つの黒砂糖ふ菓子で大黒棒は長いもので95cmあり、日本一長いふ菓子で有名。昭和を感じるアトムの人形と同じ位の高さだ。値段は木刀と比べてかなりやすいので修学旅行の際は木刀の代わりにかってみませんか（ロマンも半減）。

3. 蔵の町川越

「蔵造り」とは 文責：榎本 真鑑

私は今回の巡検で川越の蔵造りの街並みについてまとめた。本稿では蔵造りの概要と川越の蔵造りの歴史と実際に足を運んで感じたことについて紹介する。

そもそも、蔵造りは瓦の屋根と土壁によってできている。その特徴故に耐火性能が非常に高く燃焼を防ぐことができる。また、酒、繭、米穀などといった倉庫として使われたり、店舗や座敷も伴っている所謂『見世蔵』としても使われたりする。（特に川越は店蔵が多い）これらの機能を果たすため防火に加えて、防湿や防難性能も備わっている。蔵造り建物の印象に圧倒的な重量感を与えているのが厚い土壁と豪壮な屋根瓦だ。とくに屋根は最上部に壁のような箱棟がそそり立っており、一層の迫力を醸し出している。箱棟は木製の箱状の芯に、漆喰などを塗り重ねて作られており、屋根を最上部で支える棟木の保護のためである。

《川越の蔵造りの歴史》

川越の蔵造りは江戸時代からあり、徳川家と深い関わりがあった。江戸の街の影響を受けて黒い漆喰が塗られてるのが特徴で、江戸の街を軍事的、経済的にも支えた。転機が訪れたのは明治26年の川越大火で、その大火によって3分の1以上を焼失し、そのまちで燃えずに残った蔵造りが自身の耐火性能を実証したことがきっかけで蔵造りの街並みが今のように形成された。川越の蔵造りの箱棟は本来の機能のほか、箱棟そのものの装飾性が高くなっており、過剰なほど巨大な箱棟が並んでいる様は壮観だ。

《実際に足を運んでみて》

右の写真は川越の蔵造りが並ぶ通りの略地図だ。写真からわかるように蔵のほとんどが細長い作りとなっている。これは古い城下町に見られる特徴で、昔は間口税といって建物の間口の広さで税金を徴収し



【写真：地割の略地図】



【写真：観光客で賑わうようす】

たので市民はどれだけ間口を狭くするかに考えを巡らせた結果このようになった。ここから古くからある城下町の面影を感じることができる。昔は物資の搬送など江戸の台所として活躍した川越は、今では観光地として栄えている。昔の蔵造りは今では和菓子屋や昔の日本を感じられるような店が並んでおりにぎわっている。

蔵造りの街並み土地利用調査 文責：遠藤 壮一郎

今回、土地利用調査で川越の仲町から札の辻までの区間の120軒の店舗を調べた。そのうち土地利用の大分類で分けると120軒のうち飲食店が47軒で39.2%、土産物店が37件で30.8%、郵便局や病院、理髪店などの地元の方向けの店舗が15軒で12.5%、資料館が8軒で6.7%、住居が7軒で5.8%、会社が4軒で3.3%、空き家・空き店舗が2軒で1.7%だった。

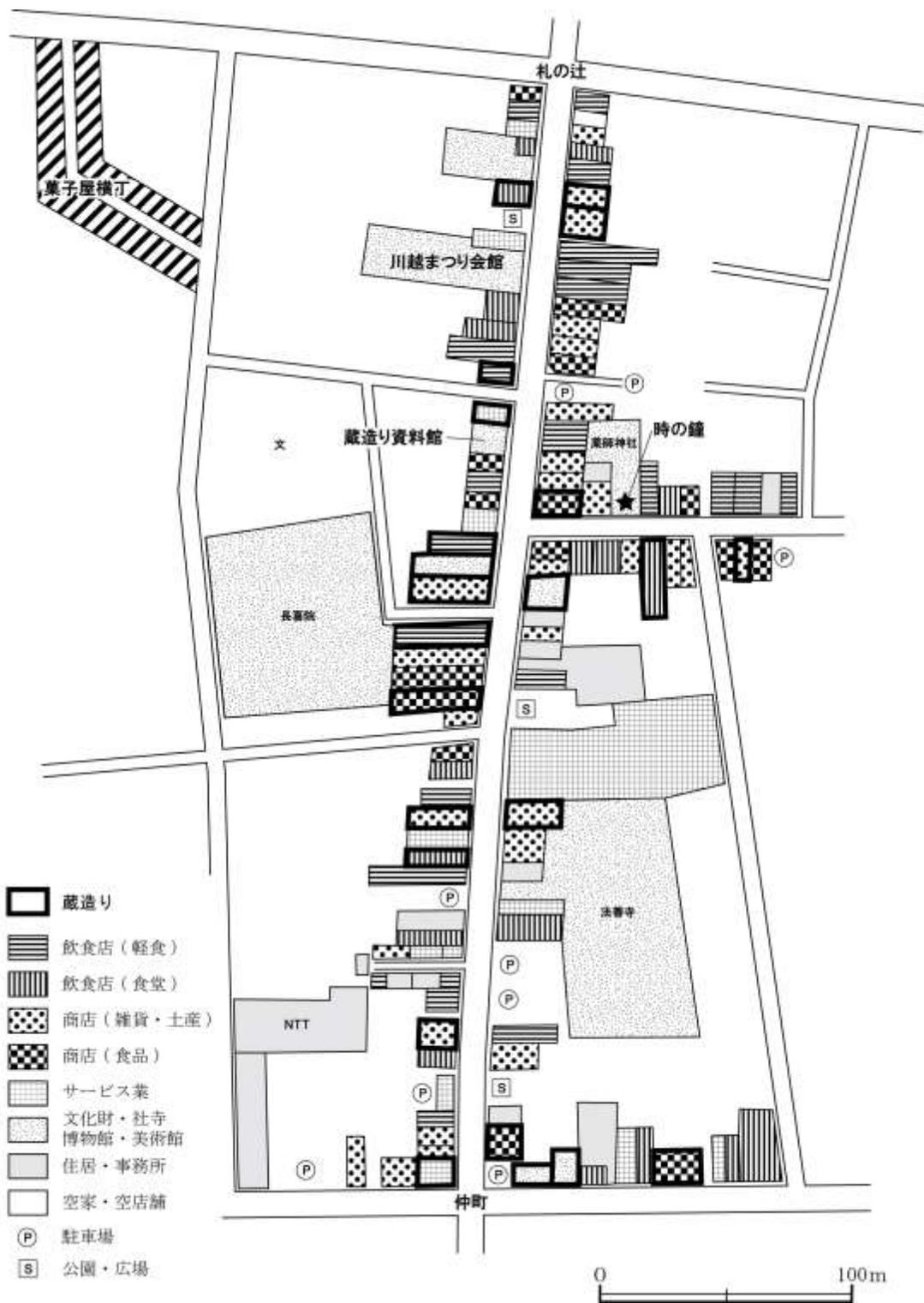
また、土地利用の小分類で分けると飲食店47軒のうち店内席ありが33軒で70.2%、店内席なしが14軒で29.8%だった。土産物店は37軒のうち食料品を取り扱っていたお店が15軒で40.5%、物販を取り扱っていたお店が22軒で59.5%だった。

さらに川越は蔵造りの街並みとして知られているため蔵造りの店舗について調べたところ、120軒中24軒で20%だった（小数第一位を四捨五入して計算しています）。

川越は日本三大蔵の街に選ばれているため蔵造りの建物が大部分を占めていると思っていたが、実際はわずか20%しか蔵造りでないことに驚いた。飲食店や土産物店、資料館など観光客向けの店舗が多く、調査当日も観光客が多かったが、そのうち半分以上は外国人の観光客だった。



【写真：左は蔵造りの街並み／右は川越の街に溶け込むスタバ】



【地図：一番街商店街「蔵造りの街並み」土地利用図（2024年）】

地理部員の現地調査により作成

4. 中学1年生のレポート

川越巡検のレポート 文責：内田 淳斗（A組）

6月9日日曜日、天気晴れ、この日は地理部で川越に行った。川越ではどの建物が本物の蔵造りで、どの建物が偽物の蔵造りかを観て調べた。埼玉りそな銀行がすごかった。他にも川越まつり会館や川越市立博物館で行きいろいろなものを観たり、川越城本丸御殿にも行った。氷川神社で結婚式をしていた。駄菓子屋さんでカードを買った。ソフトクリームが美味しかった。お土産に買った芋けんぴも美味しかった。



【写真（左／右／右下）：川越の街並み】

川越巡検の見学地 文責：上野 開都（B組）

《喜多院》

喜多院は慈覚大師が創建した神社で天台宗の神社である。また、川越大師として親しまれている神社である。喜多院は徳川家光ゆかりの建物があり、埼玉県を代表する人車である。正月にあるだるま市が有名で、重要文化財が多くある。特に喜多院慈悲堂は本堂で、重要文化財とされている。

《川越城》

川越城は、1467年に作られた城であり、江戸城を造った太田道灌によって作られた。江戸時代には、江戸の北の守りとして重要視されてきたので、代々幕府の重臣が城主となっていた。現存する建物は1848年に建てられたもので、本丸御殿の一部の玄関や大広間、家老詰所が残っており珍しい。また、川越藩は17石持っていて、江戸が重要視していたことがよく分かる。



【写真：喜多院の塔】



【写真：左は喜多院の本堂／中央は川越城／右は川越城の御朱印】



《時の鐘》

時の鐘は、川越のシンボルとして讃えられている。時の鐘は、1日に4回なり午前6時、正午、午後3時、午後6時に鐘撞きを行なっている。今まで何回も立て直されている。時を刻んでいることから時の鐘と呼ばれている。時の鐘の真下を通ると神社があり、私のおすすめた。

《蔵造りの街並みについて》

蔵造りの条件は①窓が下の写真のような窓になっていること、②店として使われていること、③表面が漆喰で塗られていること、④屋根が瓦であること。この4つの条件を基準に調べたところ、私の班は、66軒の家を調べたら、蔵造りの家は10件もなかった。私は、偽蔵造りの街並みだと思った。



【写真：左上は時の鐘／
左は蔵造りの建物／右は蔵造りの窓】

川越巡検の感想 文責：高 隼人（F組）

今回の巡検で地理部が巡検の際どのような事をするのかを知りました。まず地理部が「歩く部活」であるという事です。地理部の巡検の際、健康アプリの歩数計がありえない数値を叩き出しました。

最後に地理部の巡検の際のメリハリです。地理部は最初は課題をやり、その後に観光をするという、とてもメリハリのついた予定が、川越観光をさらに深めることになると思いました。地理部のような「メリハリ」を僕の生活の中にも取り入れようと思いました。これからも頑張っていきたいと思います。

川越巡検の感想 文責：永田 幸寿（F組）

川越の蔵造りの街並みを見て、昔ながらの雰囲気を残しているいい場所だなと思った。ポストや、右から左へと横書きをする店の看板など、古そうなものがたくさんあり、店で売っているものは刃物や焼き物といった工芸品、かき氷や茶、芋けんぴなどの飲食物など幅広くあった。蔵造りか蔵造りじゃないかについて、蔵造りは結構少なかった。歩道が狭く、ガードレールがないため人混みが激しい時は車との事故が起きないように気をつけないといけない。氷川神社では、境内の風車や風鈴の量に驚いた。おみくじは鯛の形をしていて、面白かった。参拝をする人たちが賑わっているので、縁結びの神社として人気であるということがわかった。

財布を落としてしまい、班の人や、先輩に迷惑をかけてしまったので、次の巡検や合宿では特に自分の持ち物の管理に気をつけたい。



【写真：川越の景観】

川越巡検のレポート旅記 文責：牛田 健心（G組）

6月9日僕たちは川越巡検に行きました。朝九時に川越市駅につき、蔵造りの建物を探した。蔵造りに似せた建物もあり紛らわしかった。基本的にガラスの窓があるかないかで見極めた。

12時くらい(?)にフィールドワークを終わらせて、時の鐘についた。時の鐘はとても高くそびえ立っていてとても見応えがあった。この時の鐘は午前6時から6時間ごとに鳴ります。僕は聞くことができません



【写真：蔵造りの建物】



【写真：時の鐘】



【写真：いもそうめん】

でしたが、もし今度行く機会があったら聞きたいと思います。思ったよりフィールドワークに時間がかかり、もっとゆっくり見たかった気持ちもありました。

フィールドワークを終えた後は自由時間！でもすぐには遊べません。まずはご飯を食べないとはいけません。僕はフィールドワーク中に行きたいお店を決めていました。そして行こうとしたのですがどこを見てもそのお店がない…

探し回ってやっとそのお店を見つけることができました。

ご飯は「いもそうめん」みたいな名前前のものを食べました。そして疲れたからコーラでも飲もうかなと考えていたのですが、なんと1本500円!!お

小遣いが3000円と決められている中で500円は高すぎます。さすが観光地！「いもそうめん」は僕はあまり芋の味はしなかったです。しかし、うっすら芋の味があったので、そうめんとマッチしてとても美味しかったです。そのあとは菓子屋横丁へGOm、みんなが集合した後向かいました。

菓子屋横丁にはお菓子がいっぱい！しかし観光地ということもあり、安いものなどほとんどありません。そのため僕は食べ歩き用芋けんぴを買いました。これは750円、決して安いとは言えませんが、その美味しさは格別。甘い芋けんぴのおかげで歩く辛さも乗り越えられた気がします。カリカリでした。

美味しい芋けんぴを食べながら向かった先は喜多院。とても広い仏教寺院で、少し歩くと美しい橋がありました。多くの階段があり、それぞれ登ると様々な建物があり、飽きませんでした。ここには小さめの屋台やお店があり、僕はここでダルマを買



【写真：芋けんぴ】

っちゃいました。どこに行っても綺麗な建物、景色が見られるのでまた行ってみたいなども思いました。

次に行ったのは、川越城本丸御殿。本丸御殿ってなんだろう？と思い調べたのですが、「中世や近世の日本の城において敷地内に設けられることがあった建物のひとつ」だそうです。ということは昔に



【写真：喜多院境内の美しい橋】

あった川越城の一部が現存して残っているというわけなので本当にすごいと思いました。その川越城本丸御殿の中にある庭は言葉が出ないほど綺麗なもので本当に感動しました。室内も床は板張りで昔の便所の模型があったり、川越城内で議論している様子を見ることもできました。

最後に行ったのは、川越市博物館。

ここでは昔の土器などを見ることができます。学校で習うような縄文土器や埴輪などが置いてあります。さらに、昔の人々の暮らしを小さな模型のようにしたものもあり、とても面白かったです。昔はこんな暮らしをしていたのか…と考えることもできました。

最後はバスに乗って川越駅まで行き、解散しました。とても楽しかった1日でした。



【写真：川越城本丸御殿の庭】



【写真：川越市博物館の埴輪の展示】

〈参考資料〉

<https://www.google.com/>

<http://g.kyoto-art.ac.jp/reports/3215/>

<http://www.tabi2ikitai.com/japan/j1123a/a01049.html>

<https://www.tobu.co.jp/odekake/area/tojo-line-south/tojo-linesouth008.html>

<https://www.city.kawagoe.saitama.jp/>

<https://www.city.kawagoe.saitama.jp/smph/welcome/history/index.html>

<https://www.taxlawyer328.jp/>

第六章

付記



2024（令和6）年度 地理部員紹介

【金字塔を打ち立てろ!!入試に向けて猛勉強中!!】

◎高校3年生：市川 洸太 犬島 伸遥 河合 道祐 齋藤 秀真
 佐々木 秀真 長 遙人 長谷山 悠斗 吉田 駿平

【先輩に続け!!現役部員】

◎高校2年生

○G組 雨谷 彰悟 ○I組 池田 鴻平（副部長）
○I組 榎本 眞鑑（部長） ○I組 野口 琉也（編集長）

◎高校1年生

○B組 橋本 弓彦 ○D組 水谷 颯（動画編集）
○D組 為野 進也 ○E組 塚崎 瑛登
○E組 田畑 裕理（副部長） ○F組 新井 友翔
○G組 五月女 紘大 ○G組 鈴木 涼太
○H組 安藤 隼太郎 ○H組 遠藤 壯一郎（編集）
○H組 薛 文森

◎中学1年生

○A組 内田 淳斗 ○B組 上野 開都
○C組 切手 悠介 ○F組 高 隼人
○F組 永田 幸寿 ○G組 牛田 健心

◎顧問

○村田 祐介 ○齋藤 讓司

2023 年度地理部 春合宿要項

日 程 3月27日(水)～3月28日(木) 1泊2日

宿泊場所(旅館名): ホテル「春茂登」

住 所 : 〒321-1432 栃木県日光市安川町5-13

電話番号: 0288(54)1133

行 程 往路(日光班)3月27日スペーシアX1号浅草発7:50→東武日光着9:39

(足尾班)3月27日りょうもう3号 浅草発7:40→相老着 9:32

復路 3月28日なすの278号宇都宮発16:21→東京着17:16

集 合 **東武浅草駅 正面改札口 7時20分** (厳守)

解 散 JR 東京駅 八重洲口付近 17時30分頃

合宿中にかかる費用: 総額 10,000 円程度

(内訳) 市内見学の交通費・・・¥5,000 程度

施設の入館料等・・・¥2,000 程度

昼食代・・・¥1,000 程度

その他お土産代など・・・¥2,000 程度

緊急連絡先 : 村田携帯 XXX-XXXX-XXXX 齋藤携帯 XXX-XXXX-XXXX

持ち物

健康保険証写・上記合宿中にかかる費用・生徒手帳・筆記用具・着替え・タオル類・
雨具(レインコートと傘を両方準備すると◎)・常備薬(乗り物酔いしやすい者は酔い
止め薬など)・洗面用具・デジカメやスマホなど記録できるもの・**レジュメ・フィール**

ドノート

留意点

- ・持ち物について:

全ての荷物を持って行動することになります。荷物は最低限にまとめ、身動きがとりやすいようにして下さい。キャスター付きバッグは禁止です。

- ・服装について:

私服で構いません。いつもの巡検と同様、「脚」を使った調査です。動きやすい服装、履き慣れた靴で参加して下さい。

- ・その他:

荒天などで、フィールドワークの実施が難しくなった場合、途中で中止し、宿へ引き返す可能性があります。

2024 年度地理部 夏合宿要項

日 程 7月31日(水)～8月2日(金) 2泊3日

宿泊場所：ホテル「アマネク金沢」

住 所：〒920-0981 石川県金沢市片町2-25-17

電話番号：076(224)0700

行 程 往路7月31日 かがやき523号 東京駅発9:56 → 金沢駅着12:30
復路8月2日 つるぎ22号 小松駅発14:28 → 富山駅着15:04 乗継
かがやき534号 富山駅発15:23 → 上野駅着17:28

集 合 JR 東京駅 「動輪の広場」広場 9時20分 (厳守)

(丸の内地下南口改札の外)にあります。事前に場所を確認しておくこと。)

解 散 JR 上野駅 中央改札付近 17時30分頃

合宿中にかかる費用：総額 15,000 円程度

(内訳) 市内見学の交通費・・・¥3,000 程度

施設の入館料等・・・¥3,000 程度 (落雁体験は1人¥1,650 必要)

食費・・・・・・・・・・¥6,000 程度 (2日分の夕食代+3日分の昼食代)

その他お土産代など・¥3,000 程度

緊急連絡先：村田携帯 XXX-XXXX-XXXX 齋藤携帯 XXX-XXXX-XXXX

持ち物

健康保険証写・上記合宿中にかかる費用・生徒手帳・筆記用具・帽子・着替え・
雨具(レインコートと傘を両方準備すると◎)・タオル類・常備薬(乗り物酔いしやすい者は酔い止め薬など)・洗面用具・熱中症対策用品・デジカメやスマホなど記録できるもの・レジュメ・フィールドノート

留意点

・持ち物について：

初日と最終日は、全ての荷物を持って行動することになります。荷物は最低限にまとめ、身動きがとりやすいようにして下さい。キャスター付きバッグは禁止です。

・服装について：

私服で構いません。いつもの巡検と同様、「脚」を使った調査です。動きやすい服装、履き慣れた靴で参加して下さい。

・熱中症対策について：

水分補給が出来る準備を万全に整えて下さい。高気温で、フィールドワークの実施が難しくなった場合、途中で中止し、宿へ引き返す可能性があります。

- ・ 初日の昼食について：

初日の昼食は新幹線の車内で済ませます。集合前に予め昼食を購入しておいて下さい。集合場所にはコンビニがあります。東京駅の改札内には弁当屋が無数にあります。新幹線の車内販売は飲み物とお菓子しか販売していません。

- ・ 金沢の交通事情

金沢では Suica・PASAMO が使えない交通機関があります。その場合は事前に運賃を釣り銭なしで準備しておく必要があります。一般の方の迷惑にならないように注意して下さい。

【可】 IR いしかわ鉄道、城下まち金沢周遊バス

【不可】 北陸鉄道、北鉄バス ※現地で発売している IC カードのみ利用可

おわりに

地理部の機関紙である「ちりレポ」は今号で第22号になるわけですが、お楽しみいただけただけでしょうか。私は高2であり、副部長なのでこのように「おわりに」と「ちりレポ」の一部を書いている訳ですが、実は自分は途中からの入部だったので今回が最初で最後の「おわりに」と展示用スライドによる「ちりレポ」作成になるので良い出来になっているかどうか非常に心配ですが、お楽しみいただければ幸いです。

一昨年、去年の「おわりに」は文才の溢れる先輩に書いてもらったのですが、今年は文才などどこかに置いてきた自分が書いていますので量、質ともに落ちてしまっているでしょう。暖かい目で見いただければ助かります。

さて、そんな偉大な先輩が2年連続で「新入部員がない」という趣旨の悩みとともに地理部への勧誘を書いていた記憶があるのですが、なんとそのおかげかどうかは不明ですが、今年は高入生と中入生が合わせて10名弱ほど入部してくれました。

しかし、一昨年、去年と二年連続で新入部員が入らなかったため中2、中3生の部員はゼロ名ですので、旅行好きの方やこの「ちりレポ」を読んで興味が少しでも沸いた方は水曜と金曜に高校棟5階社会科ゼミ室で活動するのでぜひお越しください！

さてこんな感じで副部長としての使命感から長々と「おわりに」を書いてきましたが、そろそろ終わりたいと思います。では！最後になりましたが、地理部の活動に関わっていただいた巡検、合宿先の方々、普段の生活を支えてくださっている保護者の皆様、巡検や合宿以外でも地理部の活動をサポートしてくださっている顧問の先生方に感謝を申し上げたいと思います。いつも本当にありがとうございます！

今後とも地理部をよろしく願います！

2024年9月28日

城北中学校・高等学校 地理部副部長 池田 鴻平

城北中学校・高等学校地理部 ちりレポ第 22 号

発 行 日：2024 年 9 月 28 日

編 集 者：野口 琉也・遠藤 壮一郎

編集責任者：村田 祐介・齋藤 譲司

発 行 所：〒174-8711 東京都板橋区東新町 2 丁目 28 番 1 号

城北中学校・高等学校 地理部

印刷製本所：〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3 丁目 11 番 24 号

共立速記印刷株式会社